
ONE PIECE ~ 青髪の転生者 ~

好角家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE 青髪の転生者

【Nコード】

N6752X

【作者名】

好角家

【あらすじ】

とある出来事で死んでしまった俺、山中怜生改めアレクシス・レオンはワンピースの世界に転生することになった。とりあえず目標はルフィに会うこと。はたったの15分で達成しちゃったから、次なる目標はグランドラインに入ることだ！！

何故かサンデーの作品のキャラの能力をもった男の大冒険が始まる。
(ほとんどは作者の趣味で書いてる感じです)

転生直前の怜生（前書き）

始まりますよ。

転生直前の怜生

どうやら俺は死んだらしい。

今俺は何もない真っ白の空間にいる。

おっと…。自己紹介が遅れたな…。

俺の名前は山中怜生。女みたいな名前だが一応男だ。ちゃんとチンモタマもある。ちなみに森。レオではない。そのところよろしく。…そんなことよりこれから俺はどうなるのか。ていうか、この状況…小説で見たことあるな。まさかとは思うが…転生したりするのだろうか？

「その通りだ」

「…え？誰？」

何だこの爺は。

「あんたは？」

「わし？うゝん…ほら、あれだ。お前達で言つとこの、神？」

「ほら…出た………っ！！？マジ??」

たまげた。俺の予感が的中した。

「お前…信号赤なのに普通に自転車で渡つたろ？」

「ああ…急ぎだったからな」

「だから死んだんだよ。思いっきり引かれてたぞ」

「車にか？」

「おう」

オイマジかよ…。やっぱ俺死んだんだな。

「それでよ。このままだとお前が可哀想だから、転生してやるってわけ。わしが」

出た！！出たよ転生！！

「そんなことあんたにできんの？」

「あつたりまえだろ！！よゆーの良子ちゃんだ！」

んな言葉いまさら使うなよ…。

「何か言ったか？」

「何も。で？どこに転生してくれるんだ？」

「お前が決めな」

「マジかよ？俺が決めていいのか？」

「いいつつってんだろ？さっさと決めろ」

こいつ本当に神様なのか？…言葉づかいなんて中高生だろ。

「…んな事急に言われてもな…。決めねえよ」

「ちっ仕方ねえな…。じゃああれだほら！“ワンピース”でいいだろ！」

「…はい？ワンピースに転生！？？あんた馬鹿か」

「何！？」

「あんな化け物がたくさんいるような世界にいつちまったらまた死ぬだろうが。死の連続だ！」

「ああ、そのことね。なら心配するな。ちゃんと能力つけてやつから」

「能力…？悪魔の実か？」

「いや……そうだな…。お前ほかに好きな漫画・アニメある？」

あんたは俺の友達か！！

しかし好きな漫画・アニメねえ…。

俺はとりあえず好きな漫画・アニメを言った。

「…へえ。なるほどな」

「…？」

「じゃあこれだ。“犬夜叉”の身体能力と技、鉄碎牙。そして“金色のガッシュベル”の主人公、ガッシュの技。これでいいだろ？」

「おいおい、神様よ！犬夜叉はともかく、ガッシュはアニメまでしか知らねえし、しかもパートナーがいないと技が出せないだろ！？」

「その点なら大丈夫だ。パートナーがいなくてもお前自身が呪文を言えば発動できるようにしてやるし、アニメまでしか知らないならアニメ終了時点までの技を使えるようにしてやるよ」

こいつ…んなことまでできるのか？見た目と違ってすげーな。

俺が唖然としている最中、この老いばれ神様は光を俺に放った。

「うわ…？なんだこりゃ？」

「これで大丈夫だ」

神様にそう言われた俺は体をじつくり見た。すると腰には一本の刀が。

「こいつはまさか…鉄碎牙??」

「ああ。だから大丈夫つつつたる？」

「すげー！！すげーな！！」

「…あと、名前を変えなきゃならんな。日本名じゃさすがにな…」

「それもそうだな…どうすんだ？」

「お前の名前、山中怜生だったな……………よし！お前は今日から

“アレクシス・レオン”だ！」

あ…あれくしすれおんだって？言いにくいなあ…。

「不満か？」

「いや…（なるほど…。怜生とレオンね…）」

「あ…オイ待て。犬夜叉の技つつたが、爪がのびてないぞ？“散魂鉄爪”が出せないじゃんか」

「それも心配無用だ。お前の意思で伸びたり引つ込んだりするからな。あと言い忘れたが、お前は犬夜叉みたいに妖怪化することはないからな。安心しろ」

「俺は半妖じゃねーっての…」

フウつと俺は息をついた。その時に思い出したんだ。服装はこのままでいいのか？と。まあ、割とフツーの恰好だったから、あえて聞かなかったがな。

「さてそろそろ準備はいいか？」

「じゃあ、行つてこい！！」

「うわっ！！！？……………」

俺はまだ心の準備ができてないつてのに、異空間にふっ飛ばされた。

海に出たレオン！

俺、山中怜生こと…えっと…ああ、アレクシス・レオンは今海の上にいる。

いや、正確には小舟の船だ。ってか、誰が用意したんだよこの船。あの爺か？

あれ…ちょっと待てよワンプの世界つつても、今どあたりの話なのかさっぱりだな。
どうすりゃいいんだ。周りは島も見えねえし。

「お？」

後ろを振り返った俺はチョイと興奮した。だって…海賊船があったんだから！！

「しかし全然しらねー海賊旗だな。麦わらの一味じゃない」

海賊旗を見たら新たな疑問が浮かんた。ここはグランドラインなのかどうなのか。

イーストフルー

東の海か

ウエストフルー

西の海か

サースフルー

南の海か

ノースフルー

北の海なのかすらわからない。

「おい！お前！！航海の邪魔だ！道を開ける！！」

海賊船からひょっこり顔を出した男が俺にそう言ってきた。

…もしかしてこいつら大したことない海賊か？だったら…俺の能力

を試すいい機会じゃないか！

そう思った俺はジャンプして海賊船に乗り込んだ。

「……！！」

「「「な、なんだこいつは！！」」」

「船長！なんか変な奴が乗り込んできましたぜ！」

「ん？…何でデメーはあ……」

海賊どもが何かごちゃごちゃ言ってるようだが俺の耳には入って
なかった。

え？何故かって！？だって…。さっきジャンプした時めちやくち
や跳んだんだもんよ！！

これはおそらく犬夜叉の身体能力のおかげ…。興奮するだろ！！

「おいてめえ！！船長の言葉が聞こえなかったのか！？」

ようやく興奮がさめたと思ったら、海賊の一味が俺の胸ぐらをつか
んで睨んでいた。

「…あ？？」

とっさに出た言葉がこれだ。しょうがない。癖なんだから。

「俺達スマツシユ海賊団を知ってて乗り込んだのか！？小僧お！！」

スマツシユ海賊団？？…聞いたことねーぞ……。

テニスが好きな海賊たちか？ww

「黙れ。うざい」

言っちゃまった。まあ、うざかったのは事実だしな。

「な、何だとお!!!!??」

「フン！お前ら！袋にしちまえ!!」

「「「「うをおおお!!!!」」「「「「

目の前にいた船長が船員たちに命令した。

「よっ!!」

俺はまず、胸ぐらをつかんでいた船員を殴り飛ばした。軽く殴っただけなのに船の外まで吹っ飛んじまった。さすが犬夜叉の力だ。馬力が全く違う。

「!!この小僧……!!」

さてと。まずはこの技から試してみますか！

「ザケル!!!!」

俺はてつきり口から出るのかと思っていたら右手から出た。まるでゼオンじゃねえか。でもなんでだ？あの爺のおかげかな？

今のザケルで船長以外全員丸焦げになった。

「ななな……ま、まさか貴様能力者か……?」

残念ながら能力者ではないんだな。ん？能力者に驚いてるってことは、ここはグランドラインじゃない？

「不正解だ。さようなら！」

「ゲフツ！！??」

船長を殴り飛ばしてやった。もちろん海にザブンとな。

「さてと…とりあえずこの船でこの先進もう。さっきみたいな小舟じゃさすがにな。こっちのほうはまだ大きいし」

そう決めた俺は食料があるか確認するため船の中を周ってみることにした。

結局リンゴ一つしかなかった。

あの馬鹿一味はどういう食生活をしとるんだ。…ん？

少し先に小舟が見えたので俺は目をキリッと開いて見てみた。よく見てみると、ルフィとコビーだった。

「オイマジかよ！？あれは…あの麦わら帽子は正真正銘…ルフィじゃねえか！！それにあの桜色の髪と眼鏡の少年は…コビー！！しかもまだぜい肉ダるダるの頃のコビーだ！！…てことは…コミックスでいうと第1巻…。アルビダを倒した直後のルフィ達だな！！！これですべて読めたぜ！！！」

レオンは興奮さめやまぬまま、船をルフィ達に近づけた。

アレクシス・レオンの設定&オリ敵（キャラ）設定（前書き）

このSSの主人公設定です。

アレクシス・レオンの設定&オリ敵（キャラ）設定

名前

アレクシス・レオン

（山中怜生）

年齢

19歳

身長

175cm

好きな物

仲間、優しい女の人、焼き魚

嫌いな物・苦手

仲間を傷つける外道、怒る女の人、下痢体質、三半規管が弱い。

性格

かなりの仲間想い。

サンジ同様、どんな理由があっても女性には手を出さない。
メロリンではないが、色恋沙汰に興味がないわけではない。
笑い声は「はははは」

容姿

ルフィの髪の色を青色にした感じ。髪型はルフィと変わらない。
体型はルフィより肉つきはいいが、ゾロほどではない。
かわいい系の顔立ち。

技

さんこんてつそう

散魂鉄爪

ひしんけつそう

飛刃血爪

風の傷

ザケル（ゼオンと同じで手から電撃を放つ）

ラシルド

武器

鉄碎牙

このSSの主人公。

神様の力で犬夜叉の身体能力と技、武器の鉄碎牙。そしてアニメ終了時点でのガッシュベルの呪文がすべて使える。パートナーは必要なし。

オリ敵 キャラ

名前

クラリス

（転生前の本名不明）

年齢

15歳

身長

160cm

好きな物

仲間（特にナミ）

嫌いな物

仲間を傷つける外道。

性格

年上には敬語を使う以外とまじめで礼儀正しい少女。

来歴

レオンと同じく転生前は純粹の日本人で、あの神様とも会っている。
レオンのことを知っているかどうかは不明。

容姿

ロングの長髪で色はピンク。

目の形などはナミ達女性キャラと変わりはない。

身長割には巨乳。

B 90・W 53・H 83

タウルス

通称、“剛腕のタウルス”。バギー海賊団の用心棒で、チェーンツ
きの斧を武器に使っていた。

顔は馬だが、体は人間。

レオンの風の傷の前に敗れ去った。

1人目

みなさんごきげんよう。俺だ。すまん…レオンだ。
転生して約15分、はやくもルフィを見つけてしまった…。
しかもコビーのおまけつき。すまないコビー。
とりあえず俺は船をルフィ達に近づけることにした。

コビーサイド

ン…？あ…！！

「あ…！ル、ルフィさん…！」

「どした？コビー？」

「西の方から海賊船が近づいてきますよ…！」

「おお…！！すげ…！！かっちょいい海賊船だな…！」

「そんなのんきなこと言ってる場合ですか…！」

全くこの人は危機感というものを知らないのでしょうか…とほほ…

サイドエンド

「お…い…！！」

とりあえず俺はルフィ達に手を振ってみた。

「よつと！」

俺はルフィ達が乗っている小舟に飛び降りた。
ルフィは不思議な眼差しで、
コビーは…完全にビビってやがる。

「あんたがモンキー・D・ルフィ？」

とりあえず聞いてみた。

まあ、原作を知ってるんだからあまりこういうことはしない方がいいかもな。だが今回の場合はしょうがない。

「え？何で俺の名前知ってるんだ？」

「俺は情報通だからな。ちよいと小耳にはさんだんだ。麦わら帽子をかぶった少年が海賊になってワンピースを目指してるってな」

まあ、情報通は嘘だけど。

ヤバイ。しゃべりすぎたか？

「おう！よく知ってたな！！」

「ルフィさん、まだ海に出たばかりなのによく知ってますね……」

ギクッ！

コビーさすがだ…。鋭いな。

「ま、まあな…。実は俺も海賊になりたくてさ、そこで頼みなんだけどルフィの仲間になってくれないか？」

「え？？仲間にか！？もちろんいいぞ！俺の仲間をつくってる最中だったんだ！」

俺は今、興奮している。表面上は冷静を装いつてるけども。あのルフイの仲間に…。

麦わらの一味になる日が！…！ついに来たのだ！…！

「お前、名前は？」

ルフイが聞いてきた。そーいまだ名乗ってなかったっけ。

「アレクシス・レオン。レオンって呼んでくれ」

「おう！よろしくな！レオン！！」

ルフイと握手した。

興奮するぜ…。この手の感触は一生忘れないぞ。

…変態みたいになつたな。失礼。

「あの…レオンさんですよ？あの海賊船は一体…？」

先ほどまでビビっていたコビーが話しかけてきた。

あの海賊船か…すっかり忘れてたな。うわ！放置してたから流されてるw

「何か知らんが、雑魚海賊の船だったぞ。ちょっと貸してもらっただけだ」

まあ、一味は俺が全員ぶっ飛ばしたけどなと付け加えた。
コビーは納得の表情を浮かべた。

「で、どこに向かっているんだ？ルフイ」

「ああ。“ゾロ”って奴がいる町だ」

「ゾロ？…海賊狩りのゾロか？まさか」

「そうなんですよ！ルフィさんときたら、あの魔獣を仲間にしようとしてるんですよ！！どう思いますか！？レオンさん！」

そうか。この時点ではまだゾロを仲間にするには反対だったな
コビーは。なんと懐かしい。

「いいんじゃない？強いんだろ？確かゾロって」

俺は適当に流した。

「強いとかそういう問題ではなくてですねー！！」

「いい奴かもしれないーじゃんか！！」

「悪い奴だから捕まってるんですよー！！」

ああ…。なんと懐かしいこのルフィとコビーのやり取り。

「ん？おい、ルフィ、コビー！なんか見えるぜ？」

おそらく海軍基地の町だろうな。早くもゾロに会えるのか。オラわ
くわくすつぞ！

…ごめんなさい悟空さん。

「見えてきましたね…」

「しっしっし…」

海賊狩り、ロロノア・ゾロ登場！（前書き）

ついにゾロが登場します！
あとあいつも…。

海賊狩り、ロロノア・ゾロ登場！

ついに来た！！

海軍基地の町！！しかしまだ転生してから一日もたっていないのにもうゾロイベントか。

「着いた！海軍基地の町！」

「はい！ついに！」

「ついにきたか」

とりあえず会話にも介入しとこう。

「しかしお前すごいなコビー」

「え？」

「ちゃんと目的地に着いたよ」

「当たり前ですよ！！海に出る者の最低限の能力です！」

まあ、ルフィは航海術ないからな。
なんて言ってる俺もないからね。

「おい、そんなことより飯食いに行こうぜ」

2人の会話を中断させた。すまん。空腹が限界なんだ。なんせリンゴ1個しか食ってねーからな。

「おーっ！いいな！！」

「ちょ、ちよつと！待ってくださいよ！！」

俺とルフィとコビーは町にある小さなレストランに入った。

ふう〜。食った食った。何か久々に腹を満たした感じだぜ。

「じゃあ、この町でコビーとはお別れだな。海軍に入って立派な海軍になれよ」

ルフィが言った。

おし、一応聞いとくか。

「え？コビーお前、海軍に入るのか？」

知ってるけどね。一応ってことで。

「はい。そうなんです。ルフィさんとレオンさんも立派な海賊になつて下さいね！いずれは敵同士ですけど……」

コビーの奴、少し涙ぐんでるな。

「そついやどこにいるんだ？ゾロって奴は……」

俺がそうコビーに聞くと、周りの客達がかなりビクビクし始めた。

「…なんだ？」

「…どうやらここではゾロの名は禁句のようだな」

しかしここまでビビるか。
すっかり忘れてたよ。この事。

「あ、さっき張り紙を見たんですけどこの基地にはモーガン大佐という人がいて…」

『ガタン！！』

「お？」

「ええ！？」

ヤバイ…。面白すぎる。コントじゃねーんだからw

俺たちは店を出た。ルフィはさっきの出来事を見てまだ笑っていた。確かにあれは傑作だな。

「僕…不安になってきました。いつ脱走するか分からない口口ノア・ゾロの名に反応するのはまだしも、なぜ海軍大佐の名にまで怯えるんでしょうか…？」

「さあな。ノリで吹っ飛んだんじゃねーか？」

「そんなわけないじゃないですか！！！」

ルフィ、さすがだな。

マイペースという何と言うか。

そんなこんなで海軍基地までやってきた俺たち。

「近くで見るとゴツついな」

「……!!」

ついに来たか…。

モーガンかぁ。これもまた懐かしい奴だ。

ルフィとコビーが会話している最中、俺は塀に登った。

「オイ…いたぞ！2人とも！あれがゾロじゃねーの??」

俺は知らないふりをする。まあ、あれがゾロで間違いないな。

「本当か!？」

「そんなはずは…せめて奥の独房とか…」

ルフィも塀によじ登り、張り付け場を見た。

「おい？あれだろ？コビー！」

俺はコビーに尋ねる。

コビーは恐る恐る塀によじ登り、チラッとだけ見た。

「……!!!!」

腰を抜かしやがった。コビーの奴。

「どうした？」

「おい、コビー?」

「く、黒い手ぬぐいに腹巻…！ほ、本物だ！本物のロロノア・ゾロです…!!」

確かにこっからみたら完全に悪人だよな！。

「あの縄ほどういたら、簡単に逃がせるよなーあれじゃ」

ルフィはボソツとつぶやいた。

「ば、ばか言わないでくださいよ！あんなやつ逃がしたら町だつて無事じゃ済まないですし、ルフィさん達だって殺そうとしますよ！」

コビーはすかさず反論する。

「そんなオーバーな…。むしろ俺はいい奴に見えるけどな」

「な！レオンさんまで！！！」

実際、いい奴なんだけどね。

「おい、お前ら」

「「ん？」」

「ひい！？」

お、ゾロがついに口を開くか！

「ちょっとこっちに来てこの縄、ほどこれねえか？もう九日間もこのままだ。さすがにくたばりそうだぜ」

ゾロは笑いながら言う。

くたばる？ゾロが？そうは思えんけども。

「おい、あいつ笑ってるぞ？」

「じゃ、しゃべった!!」

そりゃ喋りますとも。人間だもの。

「礼ならするぜ？その辺の賞金首ぶつ殺しててめえにくれてやる。
嘘は言わねえ。約束は守る」

「なあ、コビー？別に縄ほどいてもいいんじゃないの？そんなに悪
いやつ……ん？」

「ん？」

「え？」

「しーっ！」

俺達の真横に現れた人物……。リカだ！懐かしい!!
梯子持つてる。ああ、あのおにぎりのくだりか。
リカはおにぎりを持ったまま、礫場に入って行った。

「ルフィさん！レオンさん！どちらか止めてくださいよ！あの子、
殺されちゃいます!!」

「自分でやれよ。そうしたいなら」

「まあ、みとけて」

「何だお前……？殺されてえのか？消えなチビ……」

おお！こわいなー。ゾロ。

しかしこの光景をサンジが見たらブチ切れるな。

「あのね、私おにぎり持ってきたの！お兄ちゃん、ずっとこのまま
でお腹空いてるでしょ？」

そう言うとり力はおにぎりをゾロに見せる。

「私、初めてだけど一生懸命作ったから…」

「腹なんかへっちゃいねえ！！そいつを持ってとつと消える！！」

「でも…」

「いらねーつつてんだろ！踏み殺すぞガキ！！」

事情を知っているとはいえ…。可哀想だなり力…。

「ロロノアゾロオ！！いじめはいかんねえ……親父に言っぞ？」

キターーーっ！七光りの馬鹿息子！

えつと…名前はヘルメット…いや…ヘルモップ？あ…ヘルメツポか！！

「また変なのが出てきたな」

「あれはきつと海軍の偉い人ですよ…。よかったあの子…殺されずにすむ」

それが違うんだなー、コビーくん。ありゃただの小物だよ。今はな。

「チツ…七光りの馬鹿息子が…」

「馬鹿！？こら調子に乗るなよ？俺の親父はかのモーガン大佐だぞ？」

うつぜーっ！！！！

あれはどうざい野郎はなかなか居ないぞ。

「おや？お嬢ちゃんおいしそうなおにぎり持って、差し入れかい？」

「あ、だめ!!」

馬鹿息子はリカのおにぎりを奪い取って口に入れた。

「ぶへえ!?!?まず!?!くそ甘え!?!砂糖が入ってんぞ!?!普通塩だろ?おにぎりには塩!」

「だって…甘い方がおいしいと思って…」

「こんなもん食えるか!?!このこのこの!!」

「ああ!!やめてやめて!食べられなくなっちゃう!!」

あの馬鹿息子。やり過ぎだ。

「ああ…ひどい…。せつかくあの子が作ったのに…」

コビーよ。だから言っただろ?ルフィの奴は無言だな。

「大丈夫。アリなら何とか食ってくれるさ!!ひえひえひえ…」

「ああ…」

「ひどいよ…私…一生懸命作ったのに…」

リカは大量の涙をこぼし始めた。

「あーあーあー…泣くな泣くな。これだからガキは嫌いだぜ」

「ひつく…」

「悪いのはお前なんだぞ?ここになんて書いてあるか読めねーのか?『罪人に肩入れし者同罪とみなす。『海軍大佐モーガン』』親父の怖さはお前も知ってるよな?テメーが大人なら死刑つてとこだ」

チツ…あの野郎…。

さすがに俺もイライラしてきたが、ここは我慢だな。

「おい！このガキ投げ捨てる！」

馬鹿息子は後ろにいた海兵に命令する。

「……は？」

「塀の外へ投げ飛ばせつつってんだよ！俺の命令が聞けないのか！
？親父に言っぞ！！」

「はっ……！たっ、只今！！」

すると海兵の一人はリ力を放り投げた。

しかし、ルフィがナイスキャッチした！ナイスだ！ルフィ！

「きみ、大丈夫！？なんてひどい奴なんだ……」

「……」

コビーはリ力を心配している。

ルフィははまだ無言のままだ。

「しかししぶとく生きてやがるな、テメーは！」

「ああ……ちゃんと1か月生き延びてやるさ……約束は守れよ？」

「ひえひえひえ……ああー、約束は守るちゃんと1か月生き延びたら
な！まあ、せいぜいやってみる！！」

「……」

やっと思ったか……。

あたりを見回したらルフィは礫場の中にいた。

レオンの野望とゾロの野望

オッス！オラ、レオン！

…すまん。DBも好きなんだよ。

それはさておき、ルフィが礫場に入ったので俺も入ることにした。

「何だ、てめえらまだいたのか？」

いちや悪いのか？ゾロ。

「ボーっとしてると、親父に言いつけられるぜ？」

「まあね」

「親父ねえ…」

前にも言ったが会話にも介入しときたい。

「俺たちは今、一緒に海賊になる仲間を探してるんだ」

「海賊だと？ハン…！自分から悪党になり下がろうってのか？御苦
勞なこつて…」

「俺の意志だ！海賊になりたくて何が悪い！」

思わず見入ってしまう。

なんたつて麦わらの一味のナンバー1と2の会話だからな。しかも
仲間になる前の。

「——で？結局何がしたいんだよテメエは？まさか縄をほどいて
やるから力を貸せたの言いだすつもりか？」

「別にまだ誘うつもりはねえよ！お前、悪い奴だって評判だしな」

「悪いやつねえ…言つとくがそんな条件ならこっちから願ひ下げ

だ。俺にはやりてえ事があるんだ！」

「やりたいこと??」

俺がゾロに問いかけた。

「ああ。一か月ここにつつまってりゃ助けてやるとあの馬鹿息子が約束してくれた。

何が何でも生き延びて、俺は俺のやりたいことを成し遂げる！」

ヒュ。やっぱりゾロは渋いね!!

「なるほどね。でも俺なら1週間で餓死する自信あるけどね」
「ししし。俺も！」

「フン。お前らとは気力が違うんだ。もの好きな仲間探しは他をあたりな！」

「わかったよ。行こうぜ、レオン！」

「そうだな」

「いや…おい！ちょっと待て！」

ゾロが帰ろうとした俺たちを呼びとめた。

「ん?」

「それ…取ってくれねえか？」

ゾロが言ったそれとは、さっき馬鹿息子が踏み潰してグチャグチャにした、リカが持ってきたおにぎりだ。

「食つのかよこれ…もうおにぎりじゃなくて泥の塊だぞ?」

いや…ルフィよ…。

貴方も見境なしにバクバク食うでしょうw

「いいから食わせろ！！落ちてんの全部だ！！」

「ほらっ！」

ルフィはゾロの口の中にドロドロになったおにぎりを放り投げた。

「ガハッ！！！！ウゲツ…ゴクン！！」

ゾロの奴、気合で飲み込んだな。

「だから言っただろう？死にてえのか？」

あんたが言うか！！！？？ルフィよ！

「ゴフッ…あのガキに伝えてくれねえか？」

「？何て？」

「『美味かった…。ごちそうさまでした』ってよ…」

「おう！」

「わかった」

俺とルフィとコビーは今、リカの家の前に来ています。

「ほんと！？」

「ああ。ひとつ残らずバリバリ食ってたよ！」

バリバリって…。すごい表現だなオイ。

「うれしいっ！」

「あの人…噂通りの悪人なんでしょうか…？」

「違うよ！捕まったのだって、私を助けるために、モーガン大佐の息子が飼ってた狼を斬っちゃったからなの！」

それまでは野放しでオオカミが町を歩き回ってみんなすごく困って…」

「つか、オオカミなんて飼うなよな。あの馬鹿息子も。」

「じゃあ、ゾロが捕まった理由は、あの馬鹿の飼ってたオオカミを斬ったってことだけか？リカ」

「うん！」

「そうか…それもそうですよね。彼の気性の恐ろしさはさておき、賞金首を狙うことが罪になるわけありませんからね」

「な？だから最初に言っただろ？いい奴だって」

得意げに言ってみた。

「凄いですね。レオンさんの勘は」

「ま、まあな…（勘じゃないんだけどね）」

「悪いのはモーガン親子よ！少しでも逆らえば死刑で、皆ビクビクしてるの！」

「なるほど…それで店に居た連中はみんなビクついてたわけね」

知ってるけどもね。

「「「キャー！！！！」」」

民衆が騒ぎ出した。

「ル、ルフィさん！！」

「こいつ、クズだ」

「やめてください！！落ち着いて！海軍を敵に回す気ですか！！」

コビーは必死でルフィを止めようとしている。

危ない危ないルフィがやらなかったら俺がやってたな。まあ、危なくはないか。

「決めたレオン！コビー！」

「ん？」

「え？」

「…俺はゾロを仲間に引き込む！！」

待ってたぜその言葉！！船長お！

「やりやがった…！あいつ誰だ！！」

「大佐の息子を殴りやがった！！モーガン大佐が黙ってないぞ！！」

民衆のどよめきがまた大きくなったな。別にビビることはないのに。これがクロコダイルやエネルなら分かるけども。

「ルフィさん！こらえてください！相手は海軍です！！」

「知るか！何やっててもクズはクズだ！！」

「このやろう…俺はモーガン大佐の息子だぞ！！親父に言いつけてやる！！！！」

小学生かお前はwww泣きながらダサイこと言ってんじゃねえwww
また民衆がビビってるな。

「お前がかかってこいよ!!」

「ルフィさんやめてください!!レオンさんもニヤけてないで手伝
ってください!!」

「ああ。悪イ悪イ」

泣き顔の馬鹿息子は二人の海兵の肩を貸してもらい後ろを振り返っ
た。

なんちゅー顔してやる。

「俺を殴ったことを後悔して死んでいけ!お前は死刑だ!!」

まあ、確かに“こうかい”はやってるんだけどもね。

「親父に殺されちまえ!!!」

馬鹿は去って行った。

おい、捨て台詞がそれかよ。

「あんな奴。これ以上殴る価値もねえ!」

「行っちゃった…」

馬鹿が去ったと同時に、リカが寄ってきた。

「凄いのねお兄ちゃん!私胸がすつとしちゃった!」

「そうか?ならもつと殴つときゃよかったな!」

「正直俺も殴りたかったけどな」

これは本音だよ。

「リ、リカ！！こっちへ来なさい！」

リカの家から誰か出てきた。

あれは確か…リカのお母さんのリリカだったな

「あの人と口を聞いちゃだめ！仲間だと思われたらリカも殺されちゃうのよ！さ、家へ入って！」

リカは寂しそうな眼差しで俺たちを見ていた。ルフィは笑顔で手を振っていた。

「や、やっぱりただじゃ済みそうにありませんよ！！例の大佐が怒って下手すれば海軍が動く恐れも…」

「馬鹿！コビー。ビビりすぎだつての」

「何でレオンさんはそんなに冷静なんですか！？」

「さあ。なんでだろうね」

1回死んでるからかもな。

「おれ、ゾロに会ってくる！」

「ああ。俺も行くよ！ルフィ！！」

ここは【海軍基地本館】

一人の大男が葉巻を吸っている。

「俺は…偉い！」

「はっ！何しろ大佐でありますから！モーガン大佐！」

その大男こそ、モーガン大佐だ。一人の海兵はモーガンに敬礼をする。

「その割には近頃町民どもの“貢ぎ”が…少ねえんじゃねえか？」

「はっ！その…大佐への納金にしましてはなにぶん、町民たちの懐にも限界がありました…」

「…懐は問題じゃねえ…要は俺への敬服度だ！」

「親父っ！」

扉が勢い良く開いた。左ほほをを押さえながらやってきたのは息子のヘルメツポだ。

「どうしたヘルメツポ？騒々しいぞ！」

「ぶっ殺してほしい奴がいるんだよ！！！」

その頃、ルフィとレオンは、ゾロがいる磔場に再び来ていた。

「よっ！」

「オッス！」

「またお前らか。何の用だ？海賊の勧誘なら断つたはずだぜ？」

「俺はルフィ！縄ほどいてやるから仲間になってくれ！」

「話聞いてんのかてめー！！！」

凄いなルフィ。さすがは主人公。人の話を全く聞かないという…。

「俺にはやりたいたいことがあると言っただろう。誰が好き好んで海賊なんて外道になるか！」

「別にいいじゃんか！お前元々、悪い賞金稼ぎって言われてんだから」

「世間でどう呼ばれているかは知らんが…俺は俺の信念に後悔するようなことは何一つやっちゃいねえ！これからもそうだ！」

「知るか！俺はお前を仲間にするって決めた！！」

「勝手なこと言ってんじゃねえ！！」

この二人…漫才できるんじゃない？ww

「いいじゃないかゾロさんよ。海賊になったら達成できないことなのか？ゾロの野望ってのは」

「…いや、そういうことではないが」

まあ、野望も実は何か知ってるけども。

「あ、お前刀使えるんだってな？」

「！…ああ、体に何かくくりついてなけりゃ一応な」

刀か…。あ！鉄砕牙の存在…完全に忘れてた。

思ってたんだが、ワンピースの世界には妖気なんてないが、爆流波とか撃てるのかな？

「どこにあるんだ？」

「取られたよ。馬鹿息子に。命より次に大事な宝を」

「宝かー！そりゃ一大事だな！よし！俺が馬鹿息子から刀取ってくる！」

「ルフィが？」

「何!？」

刀とってきてやるから仲間になれって言う気だな。

「そして俺から刀を返してほしけりゃ、仲間になれ!ししし!」

おいwルフィw

「立ちワリイぞてめえ!!」

「よし、行ってくる!!」

「オイ待て!!」

「頑張れよーっ!ルフィ!!」

「基地にのり込むつもりかよあいつは……」

ルフィは塀を乗り越え、基地に向かって走って行った。
入れ替えて逆方向からコビーが来た。

「お、コビーも来たか」

「おい、ひとつ聞いていいか？」

「ん？」

ゾロが俺に?なんだ?

「お前は何で海賊になったんだ？」

何で?うーん…。

「……何でだろうな…。まあ、俺は世界を自分の目で見るのが野望だから。あとはルフィについて行くこと。これだけだ」

「……そうかい…」

2人目

ここは海軍基地の屋上。モーガン大佐と海兵たちが協力して何かをやっている。

「よし！そこで止める！そのまま立たせるんだ！！」

どうやら、モーガンの姿をした像を海兵たちが協力して起こしているらしい。

その横でヘルメツポが何やら騒いでいる。

「親父っ！何で仕返しにいかねんだよ！俺を殴りやがったんだぜ！！？親父にも殴られたことのない、俺の顔を！！」

「……！！俺が今までなぜお前を殴らなかったか分かるか？」

「え……？そりゃ親父にとって俺が……」

「そうお前が……殴る価値もねえ、ウスラバカ息子だったからよ！！」

「！」

「ほがぁ！！??」

モーガンの強烈なパンチでヘルメツポは吹っ飛んだ。

“殴る価値もない”先ほどルフィが言ったことと全く同じである。

『斧手のモーガン』

その名の通り、右腕は手ではなく斧になっている。

「何で俺が貴様の喧嘩の、尻拭いしなきゃならねんだ。俺が手下すのは、俺に逆らった奴だけだ！

勘違いするなよ……？偉いのはお前じゃねえ……この俺だ！！」

「……！！」

その威圧感に、泣きつ面になるヘルメツポ。

「そっぴや、礫場にネズミが一匹侵入したらしいな……」

「へ？あのチビの事かい……？あいつなら俺がちゃんと……」

「ちゃんと……殺してきたんだろっうな！？」

鋭い眼差しでヘルメツポを睨みつけるモーガン。

「は？……いや殺すつてありやまだホントガキだしよ……。自分でなにしたかなんて……」

「おい！お前、町へ行つて殺して来い！どんなガキでも俺に逆らえば反逆者だ……！」

ヘルメツポの言い分を完全に無視し、海軍中尉の男にモーガンは命令する。

「そ、そんな……。大佐！あいてはまだ幼い少女です！たとえ大佐の命令でも私には……！！」

「できねえつてのか？お前は海軍中尉だろう……？中尉は大佐より偉くねえよな？」

「は……はい……」

モーガンは少しずつ中尉に近づいて行く。

「だったら貴様は俺にたてつく権利はない！俺が殺れと言つたら殺れ……！」

「で……できませんっ……！」

「じゃあ、テメエも反逆者だ……！！」

モーガンの斧で中尉は上から背中を斬りつけられた。

「うわああ……！！！！親父……何もそこまで……」

「中、中尉っ……」

「まあいい……町民どもの見せしめに後で俺が直々に町へ行くとしてよ
う……」

俺は海兵として大佐にまで登りつめた！いいか！世の中称号がすべてだ！！この基地で最高位である俺は最高に優れた人間でもあるということだ！偉い人間がやることはすべて正しい！違つかてめえら……！！？」

「……はっ……その通りであります！大佐……！！」「……」

海兵達はビクつくように敬礼する。

「見る！これが俺の権力の象徴だ！長い年月をかけてきょう完成したばかりの念願の像だ！

さあ早く像を起こせ……！！この基地の頂点に俺の偉さを示すんだ……！！」

海兵たちが一齐にロープを引っ張り、再び像の体を起こし始めた。

「おつかしいーな……。海兵が全くいねえ。どっかで会議でもやってんのかな？」

ゾロの刀を取り返しに来たルフィは、基地の真下で困り果てていた。

「……ん？何か上で声がしたな？……よし、行ってみよう！ふん！」

ルフィは右腕を伸ばした。

「ゴムゴムの……ロケット……！！！」

「な、何だありや……！？？下から何か飛んできた……！」

「うわっ……飛びすぎた……！」

ルフィは勢いよく飛びすぎたため、像にかかっていたロープを握りしめ、スピードを急停止させた。

「は……！！……？？」

「バカッ……！！！」

像の胴体が崩れ落ち、基地の真下へと落ちてしまった。

「あ……！！！」

この光景を見て、モーガンは涙、ヘルメツポは驚いた表情でルフィを指差し、海兵たちは呆然としていた。

「あちゃー……！！……ごめんなさい……！！！」

「あいつを捕まえろ！！！！！！俺が殺す！！！！！！」

「「「「「はっはっはっ！只今！！」」」」」

「親父！！こいつ！！俺を殴った奴だよ！！だから言ったる！ろくなやつじゃねえんだって！！」

「あ、お前探してたんだよ」

「ぎゃああ！離せ貴様！親父助けてえ！！」

ルフィはヘルメツポをフン捕まえ、本館へと入って行った。

「本館へ侵入したぞ！！追えええ！！」

「た、大佐！礫場に誰かいます！！」

「何イ？次から次へと反逆者か！！！！皆殺しにしてやる……」

モーガンはさっきの出来事でかなり頭に血が上っている様子。

「ええ！？ルフィさんが基地の中へ！？また無茶苦茶なことを……」

「本当だぜ……何者なんだあいつらは」

「ルフィさんの勝手な行動を、レオンさんもなぜ止めないのでしょ
うか……」

そういいながらコビーはゾロの縄をほどきはじめる。

ちなみにレオンはコビーが来たと同時に礫場を出て行った。どこに
行ったのかと言うと、

最初に行ったレストランのトイレで大便中です。

「…？おい、いいのか！俺に手を貸せばてめえが殺されるぞ」

「貴方に捕まる理由はないはずです！僕はこんな海軍見てられない！！それに…僕はきつと正しい海兵になるんです！ルフィさんが海賊王になるように！」

「何…？海賊王だと！？意味分かって言ってるのか！？」

「えへへへ…僕も驚きました。けど、彼は本気です！そういう人なんです！」

「パン！！」

ゾロの縄をほどいていたコビーの肩に銃弾が当たった。おそらく基地に居る海兵の仕業だろう。

「！！……」

ゾロはすさまじい目つきで背後にそびえたつ基地を見た。

「こつちだ！逃がすな！！」

「ゾロの刀はどこだ！！」

「ゆう！言っから引き…引きずらないで！！」

その頃、本館に入ったルフィはヘルメツポを引きずり、ひたすら走っていた。背後からは海兵数名が追いかけている。

「早く言えよ！ゾロの刀はどこにあるんだ！」

「だ…だから言っから…引きずるのやめでぐへ……」

ルフィは動きを止めた。

「よし、言え」

「俺の部屋にあるんだ…もう…とっくに通り過ぎた…」

ヘルメツポは今にも気絶しそうだ。

「先に言えよ！戻んなきゃいけないだろ！」

そう言つて、ヘルメツポの顔をまた殴るルフィ。

「ぎゃー！！また殴った！！」

「動くな！！大人しく捕まるんだ！！」

「！！いやだ」

ルフィの背後に現れた、3名の海兵は銃を構えている。

「ん？」

「撃てるもんなら撃つてみる！！」

「ぎいやあああああ！！！！！！」

ルフィはヘルメツポを盾にして突き進み始めた。

「な……！！ヘルメツポ様を盾に……っ！！」

「あああああ！撃たれた～～！！血だああ！！！！」

肩を撃たれたコビーだったが、何とか生きていた。

「ふう…生きてたか…」

「はあはあはあ…」

「すぐに逃げる。あいつらが下りてくるぜ」

「はあ…はふっ…あ、そうだ！貴方の縄をとかなきゃ…」

コビーは体を起こし、外れていた眼鏡をかけた。

「俺はいいんだ。1か月耐えれば助かるんだから。早く行…助かりませんよ！！あなたは三日後に処刑されるんです！！！」

「何？…何言つてやがる！俺はここで1か月生き延びれば助けてやるとあの馬鹿息子が約束を…」

「そんな約束！初めから守る気なんてなかったんです！だからルフィさんは貴方にかわってあいつを殴ったんだ！…真剣に生き抜こうとした貴方を踏みにじったから！」

「！！…何だと？」

「もう海軍は貴方の敵にまわってるんです！お願いです！この縄をほどいたらルフィさん達を助けてください！」

「彼らは…特にルフィさんは僕の命の恩人なんです！貴方に海賊になれとまではいいませんが…」

「そこまでだ！！モーガン大佐への反逆につき、お前達二人をこの場で処刑する！！」

そんなコビーの願いもむなしく、銃を持った大勢の海兵たちが銃口をゾロとコビーに向けた。

「くっ……！！」

「ああ……!!」

「この部屋だな！」

一方、ルフィはついにヘルメツポの部屋にたどり着いた。部屋を見渡してみると、刀が3本置いてある。

「あ！これだな!!」

でも三本もあるぞ？おい、ゾロの刀はどれだ」

この時点でヘルメツポは完全に気絶していた。

「何だこいつ……気絶してるよ」

ルフィは部屋の窓を眺めた。

「……ん？磔場で何かやってる……？……！ゾロ！コビー！……あれ？レオンは？」

「基地を取り囲め！！あの麦わら小僧は絶対に逃がすんじゃないぞ

！……」

「……ちっ……」

「モ…モーガン大佐!!」

ついにゾロとコビーの前にモーガン大佐が現れた。

「面白えことやってくれるじゃねえか…てめえら三人でクーデターでも起こそうつてのか?…ロロノア・ゾロ…。てめえの評判は聞いていたが、この俺を甘く見るなよ…貴様の強さなどこの俺の権力の前には、カス同然だ…!!…構えろ…!!…!!」

「ガチャ」

海兵全員が、ゾロとコビーに銃口を向ける。

「ひっ!!…?…?」

「……!!（俺は…こんな所で死ぬわけにはいかねえんだ…!!）!!俺にはやらなきゃいけないことがあるんだ…!!…約束したんだ…!!」

【町のレストラン前】

「ふう…スッキリした!!こればかりはさすがに治ってねえか…いくら強い体つつつても…」

さてと…そろそろいかなえと…戦闘が始まる時間だよな多分…。

レオンは屋根の上を華麗に飛び続け、礫場へ向かった。

「（約束したんだ……！！俺はまだくたばるわけには……！！！！）」

「ゴムゴムの……ロケット……！！」

「射殺しろ……！！！！」

ルフィはゴムゴムのロケットで、窓から礫場へと飛び、ゾロ達の前に立ち、盾になった。
そして銃弾をすべて受け止めた。

「……お前っ……！！！！」

「ルフィさんっ……！！！！」

「麦わら……」

「につしっし……効かーん……！！！！！！！！」

ルフィは、ゴムの特性を生かしなんと銃弾をすべて跳ね返した。

「うおおおおっ……！！！！！！」

「んなはっはっはっは……！！！！」

これにはさすがのモーガンも驚いている。

「てめえ……一体何者なんだ……！！！！」

「俺は、海賊王になる男だ！！」

ほら！お前の宝物どれだ！？わかんねえから三本持ってきたぞ」

「三本とも俺のさ…俺は三刀流なんでね…」

「…！ここで俺たちと一緒に海軍と戦えば、政府にたてつく悪党だ！このまま死ぬのとどっちがいい？？」

「てめえは悪魔の息子かよ…まあいい…ここにくたばるぐらいならなつてやろうじゃねえか…海賊に…！！」

レオンVSモーガンと友達

やっほう！

前回はほとんど出番がなかった俺だ。

まあ、しょうがない。ガキの頃から下痢体質だからな。

「おー！レオン！」

「レオンさん！！」

俺が礫場に戻ったところには、海兵たちはボロボロになっていて、ゾロの縄もほどけていた。

どうやら、ルフィに吹っ飛ばされた直後か。

「た、大佐！我々の手には負えません！！」

「ゴム人間なんて…無茶苦茶だ！！ゾロだけでも手に負えないのに！！」

「……大佐命令だ…今弱音を吐いた奴あ…頭撃って自害しろ！！！俺の部下に…弱卒は要らん！！！」

「……！！」

海兵たちは銃口を自らの頭に向け始めた。

さて…。いよいよ大佐のお出ましか？？

「どうかしてるぜ！この軍隊は！！」

確かに。

「ルフィ。あのモーガンっての、俺に倒させてくれよ」

俺はルフィの右肩に手を置いて言った。

「ああ。別にいいぞ」

「サンキュー！」

そう言う俺はモーガンめがけてダッシュした。

「俺は海軍の敵だぜ！死刑にしてみる！！大佐よ！！」

色々試したい技があるんだ。きっちり相手してもらっぜ。

「レオンさん…。こんな海軍潰しちゃええええ！！！」

「ししし…」

「……」

コビーは叫び、ルフィは笑い、ゾロは沈黙している。

「身分も低い…称号もねえ奴らは…この俺に逆らう権利すらねえ事を覚えておけ！」

コートを脱いだなモーガン。本気出すのかな？

「俺は海軍大佐、斧手のモーガンだ！！！」

「んなこと知ってるっての！！」

「死ねえ！！！」

モーガンは俺に斧を振りおろしてきた。が、俺は左手で斧をつかんだ。

「くっ……」

「す…凄い！レオンさん！」
「やるな！。あいつ」

そついや、ルフィ達の前で戦うのは初めてだっけか。

「く…離せ！小僧！！」

「しょうがねえなあ…ほらっ」

俺は注文通り、手を離してやった。

「…貴様は死刑だ！！！！」

今度は横から斧を振ってきたので、しゃがんでかわし、モーガンの腹に一発パンチを入れてやった。

「ぐはっ！！！！」

モーガンはよろめいた。

その隙にこいつをくらわせてやる。

「散魂鉄爪！！！！」
——ズバッ！！

「ガハッ！……………」
——ズシーン！！

腹から顔にかけて爪の後をつけられたモーガンは、そのまま後ろに倒れた。

しかし本当に爺の言うとおりだ。技名叫んだら右手の爪が伸びやがった。

「……た、大佐が……大佐がやられた……」

「おーっ……スゲーな！レオン……」

「……勝負ありだな」

「待てええ……」

俺がルフィ達と勝利の余韻に浸っていると、前方から怒声が聞こえた。

馬鹿息子がコビーの隣に立ち、銃口を向けていた。

「こいつの命が惜しけりゃ動くんじゃねえ！ちよつとでも動いたら撃つぞ！」

「……ヘルメツポ様……」

「ルフィさん！僕は！ルフィさん達の邪魔をしたくありません……死んでも……」

「ああ……知ってるよ」

ルフィは笑顔で言う。

「あきらめる馬鹿息子！コビーの覚悟は本物だぞ！」

ルフィは構えながらじわじわとコビー達に近づく。

「おい！てめえ！動くなっつたろ！撃つぞ……」

「ゴムゴムの……銃……」

「て……手が……？？ぶほお……？？」

案の定。ヘルメツポはルフィによって倒された。

「た……大佐が負けた……！ モーガン大佐が倒れた……！」

「まだ俺たちをとらえてえ 奴は名乗り出る!!」

└─┐
└─┐
└─┐
...
└─┐! └─┐!
└─┐
└─┐

海兵たちは互いを見あう。

「「「「「やったあ！！解放されたあ！！！！モーガンの支配が終わったんだ！！！！海軍バンザイ！！！！」」」」」

海兵たちは一斉に武器を放り投げ、我を忘れたかのように喜んだ。

「なんだ？大佐がやられて喜んでやんの」

「変な奴らだな」

「……みんな、モーガンが怖かっただけなんだ!!!」

「...う」

——ドサッ！

突然ゾロが倒れた。さすがに限界だったか？

*
*
*

俺とルフィ、ゾロ、コビーの四人はリカの家で食事をごちそうになっていた。

何故か俺とルフィはゾロより食が進んでいた。ゾロはそのことに不

思議がつていたが。

焼き魚がなかったのが残念だ。

「すいません。何か僕までごちそうに……」

「いいのよ。町が救われたんですもの」

しかしリリカさん。180 態度変わったな。ま、いいけどね。

「やっぱりお兄ちゃんたち凄かったのね！」

「だろ！？もつと凄くなるぞ俺たちは！」

「俺は拍子抜けだぜ。あんなに恐れられていたモーガン大佐が、まさかあの程度の強さだとはな」

フフ。一度こう言うセリフを言ってみたかったんだよな。

「それで？ここからどこへ向かうつもりなんだ？」

ゾロがルフィに問う。

「グランドラインへ向かおう」

「ブー……っ！！！！！」

ルフィの大胆発言に、コビーは思わずジュースを吐き出した。

「んま！また無茶苦茶な！！まだ三人なのにグランドラインへ入るなんて！死に行くようなもんです！！分かってるんですか！？あそこは世界中から最も強豪な海賊たちが集まってるんです！！」

「大丈夫だろ？俺もルフィもゾロも強いし」

自分で強いつて言うのはちょっと抵抗があるな。

「まあ、どの道“ワンピース”を目指すからには…その航路をたどるしかねえんだ…。それでいいだろう」

「いいって！レオンさん！ゾロさん！貴方達まで！？」

「いいだろ？別に」

「そうだぜ。お前は行かねえんだろ？」

「行きませんけど！心配なんですよ！！いけませんか！！！？？」

「いや…それは…」

コビーの圧力にちょっと引いてしまっ、俺とゾロ。

「んなことよりお前は大丈夫なのか？コビー」

「え？」

俺はコビーに一言言ってみることにした。

「雑用でもアルビダって奴の海賊船に2年いたのは事実なんだろう？海軍の情報力を侮るな。それがばれたら入隊なんて出来やしないぜ？」

それを聞いてコビーは、不安そうな表情になる。

「失礼！」

凄いタイミングで、海兵たちがリカの家に来てきた。

「君らが海賊と言うのは…本当かね？」

「そうだね。仲間も二人できたことだし。今から海賊ってことにしよう！」

「…反逆者としてだが、我々の基地とこの町を救ってもらったこと

には一同感謝している。だが！君らが海賊だと分かった以上、海軍の名において、黙っているわけにはいかない！」

まあ、そりゃそうか。

「即刻。この町を立ち去ってもらおう。せめてもの義理は通し、本部への連絡は避ける」

そつでないと困るぜ。転生してきたばつかなのに海軍に捕まるなぞあごめんだからな。

「「「オイ海軍！！なんだその言いぐさは！！！！テメェらだってモーガンにビビってただろ！？我々の命の恩人だぞ！！」」」

「じゃあ行くか。おばちゃん、ごちそうさま」

「ふうゝ食った食った」

「……」

俺たち3人は席を立ち、扉へ向かった。

「君も仲間じゃないのかね？」

「え…？」

海兵がコビーの存在に気付いた。

「…ば、僕は…僕は彼らの仲間じゃありません…！！」

俺が一瞬ルフィの顔を見ると、笑っていた。

「待ちたまえ！君達！！本当かね？」

「……俺、こいつが今まで何やってたか知ってるよ！」
「ルフィさん……？まさか……」

ルフィは今までのコビーの素性を話し始めた。が、素性がばれたら海軍に入隊できないと思ったコビーは、思いつきルフィの顔を殴った。

「……！！やったなこのお！！このやるこのやる！！！」
ルフィはコビーをボコボコに殴り始めた。さすがにやり過ぎと思っていた俺とゾロは止めてやった。

「やめたまえ！！君らが仲間じゃないことはよく分かった！！即刻！この町を立ち去りなさい！！！」

ルフィの猿芝居。なかなかだぜ。

俺たち3人は海岸に戻ってきた。
船に乗る準備をしている。

「大した猿芝居だったな。あれじゃいつばれてもおかしくないぜ」
「ハハっ！そうだな！」
「しし。あとはコビーが何とかするさ！絶対！」

頑張れよコビー。この後の展開を知ってるとはいえ、何か泣けてくるな。

「ル、ル、ルフィさん!!」

「コビー!!」

「ありがとうございます!!このご恩は決して忘れません!!」

コビーは俺たちに、いや、ルフィに向かって敬礼した。

「海軍に感謝される海賊なんて聞いたことねえよ」

「ハハっ!確かに」

「ししし!また会おうな!!コビー!!」

このルフィの言葉と同時に、船を出した。

「全員敬礼!!」

「...え?」

「いい友達をもったな!」

「...はい!!」

*

「よし!!レオン!ゾロ!!」

「おう!」

「ああ!」

「行くかあ!!グランドライン!!」

いよいよ本格的に冒険が始まるな。くっー!!ワクワクしてきたぜっ!!!!!!

道化のバギー

……ごきげんよう。海軍基地の町を出た俺たちは、今海の上に居るが…俺は元気がない。

え？何故かって？犬夜叉の能力をもつてんのに、船酔いになっちゃまったから…。

「——ったく。海賊が船酔いなんざ、聞いて呆れるぜ！」

ゾロが皮肉るようにレオンに言う。

「しししし！おもしれーなー。レオンは」

まいった…。俺は下痢体質なうえに三半規管が弱かったことをすっかり忘れていた。

こっちに来たことで完全に舞い上がってたな。…しかしどうする…。チヨッパーが仲間になるまでまだ結構あるぞ…。次の町で薬を探すしか…。

「だいたい、ルフィもルフィだ！お前が航海術もってねーってのはおかしいんじゃないか？」

「おかしかねえよ。漂流してたんだもん俺は。お前こそ、海をさすらう賞金稼ぎじゃなかったのかよ？」

「俺はそもそも賞金稼ぎと名乗った覚えはねえ！ある男を探しに海へ出たら自分の村へも帰れなくなっちゃったんで、仕方ねえからその辺の海賊船を襲って生活費を稼いでた…それだけだ」

「…何だ、お前迷子か」

俺とルフィは口をそろえて言った。

「その言い方はよせ！！！！てめえら！！！」

「うぶ…。しかし酔ってはいるが…腹へらねえ？」

「確かに…ハラヘッタ…」

今度はルフィとゾロが口をそろえて言い、そのままバタッと倒れた。ついに、三者とも横になってしまった。

「…！！ルフィ、あの鳥食えるんじゃない？」

俺は空を見上げながらそう言った。この後の展開を知ってるからな。

「ホントだ！俺が捕まえてくる！！」

「どうやって…？」

ゾロはちらつとルフィを見る。

「まかせろ！ゴムゴムの…ロケット！！！」

——バシュン！！

「なるほどね…」

「餓死は免れるな」

一応そう言った俺だが、やはりルフィは鳥に食われてしまった。

「ぎゃゝゝゝ！！！！助けてえ！！！！」

「あゝあ…」

「あほ——っ！！！！！！！！」

ゾロは必死でオールを漕ぎ、ルフィを追いかける。

「お、おいっ！ゾロ！揺れまくりだ！！吐いちゃう！！」

し…死ぬっ…。くそっ！しまった。こうなるなって知ってたから、展開を変えればよかった…うぷっ！

「くそっ！！我慢しろ！！——たくっ！あの馬鹿は何やってんだ！！」

「おゝい！！止まってくれえ！！その船！止まれえ！！！！」
「ん？遭難者か？？こんな時にっ！」

俺が前方を見ると、男三人が海の真ん中で遭難していた。…だれだったかな？あいつらは。名前すら出てこねえ…。

「船は止めねえ！！勝手に乗り込め！！！！」
「「「なっ！？なにい！！？？」」」

遭難者三名はなんとか俺たちの船にこぎつけた。

「へえ…。よく乗りこめたな！！」
「「「引き殺す気か！！！！」」」

引き殺されるくらいいだろ。こちとら吐きそうなんだぞ…。

「ハアハア…何て乱暴な奴だ！！」
「おい！この船を止める！！」
「俺達ああの、海賊“道化のバギー”様の一味のもんだ！！」

真ん中に居る男がゾロに向かってナイフを差し出す。

しかしバギーか……いや、今はそんなことはどうでもいい。酔いを止めねえと！！

「ああ！？」

バギーの下っ端たちはあっけなくゾロにボコボコにされた。

「あつはつはつは……！！！」

「貴方が海賊狩りのゾロさんだとはつい知らず、失礼しましたあ！」

「！！」

「……あ、そちらの方は？」

いちばん左のデブ男は俺を指差した。

「気にするな、仲間だ。そんなことより、何で海賊が海の真ん中で溺れてたんだ？」

「それだっ！よく聞いてくれやした！！」

こいつらの話をまとめると、ある一人の女にうまく出しぬかれ、船と宝を奪われたらしい。おまけに天候を操るそつだ。ま、完全に“ナミ”だろうな。……しかしナミか……序盤のナミはおっぱい小さいからなあ……バスト86だっけ？……いかん！……酔いがまたまわってきた……。

「天候まで操るのかその女……海を知り尽くしてるな。航海士になつてくれねえかな……」

「うふ……。おいゾロ、そろそろどこかの島に上陸してくれ」

「ハア……。わーったよ。待ってる」

「…頼んだ……」

すまん。そろそろ限界が来そうだ。海に吐いてもいいが、なんとかそれは避けたい。

「オイ…それよりどうする宝……」

「そうだが…このまま帰っちゃバギー船長に……」

「おい…そのバギーってのは誰なんだ？」

ゾロは下っ端たちに問う。

「俺たちの海賊船の頭ですよ…“道化のバギー”を知らねえんで？
悪魔の実シリーズのある実を食った男でね恐ろしい人なんだ！！」

「……悪魔の実を……？」

…確かにあの鼻は恐ろしい……。やべ…もう無理だっ！！

5分後、俺たちは島に上陸した。
結局さつき海で吐いちゃったから、吐き気はおさまったが、まだ体がフラフラする。

「つきました！ゾロの旦那！と……」

「レオンだよ……」

「あ、レオンの旦那！」

「何かがらんとした町だな… 人気がねえじゃねえか…」
「何か行事でもやってんじゃねえの？」

まあ、バギーに恐れて避難してるんだろ。

「実はこの町、我々バギー一味が襲撃中にして…」

「なるほどな…。とりあえず、そのバギーってのに会わせてくれ。
ルフィの情報が聞けるかもしれないねえ」

「…「わかりやした！！！」」

「レオン、お前も来るか？」

「いや… 人がいないんなら、どっかの民家で勝手に休んでるよ。ま
だフラフラだ」

【To Be Continued】

犬く宝物！！

鳥に連れて行かれたルフィは、オレンジの町にある酒場に居た。
しかも檻の中に居る。

周りには、バギー一味、海賊専門の泥棒女のナミもいる。
ルフィはナミに騙され、しかもバギー達に捕まっていたのだ。

「野郎共！！特製バギー玉準備イ！！！」

「「「「うおおおお！！！！」」」」

一味の頭、バギーは砲弾を用意するように部下に命令する。

「よし見せる！！！！その威力！！！！」

——ドォン！！ゴゴゴゴゴゴ！！！！

砲弾は町の家を貫通し、すさまじく爆発した。

「……！！これが…バギー玉…」

「……」

ナミは驚愕し、ルフィは沈黙している。

一方その頃、ゾロ達と別れたレオンは、ある民家の前に居た。

よく見てみると、『PET FOOD』と看板に書かれてある。

「すげー爆発だったな…。どうせバギーの砲弾だろうが…。とにかく…ここにいりゃそのうちルフィ達も来るだろう…。」

「フー…だいぶ体が楽になったけど、酔い止め探さねえとなあ…。このままじゃキリが…。あれ?…」

レオンが下を見てみると、一匹の白い犬がレオンを見つめていた。

「あ、こいつまさか…シュシュか!?’」

「……」

「よう!」

「……」

「おい!なんか反応しろよ!シュシュ!」

シュシュはまるでレオンに反応しない。というか、何の興味も示していないのだろうか。

「くそっ!この檻さえ!!なんとかすれば!」

「もう駄目だ…血が足りねえ…。ん?おうレオン」

するとそこにルフィとゾロが戻ってきた。

「オッス、お前ら。あれ?ゾロ…お前その怪我は…」

「ああ…少し油断した……」

そうか。バギーのせいだったっけな。

「レオン！お前、体もういいのか？」

檻の中に居るルフィが俺に聞いてくる。

「おう、だいぶな」

「おい…なんだその犬？」

「犬？あ、犬だ」

二人もシュシュの存在に気付いたか。

「ああ、さつきからその店の前にずっと座ってたよ。全然吠えねえぞ？」

「これなんだレオン？犬か本当に？全然うごかねえよ」

「さあな…。それよりその檻から出る方法を考えた方がいいんじゃないのか？」

「そうだぞ、ルフィ…遊んでねえで……」

「…死んでんのかな？」

ルフィはシュシュに思いつきりツ目つぶした。
これに怒ったシュシュはルフィの顔にかみついた。

「痛てえ！！！！何すんだ犬！！！」

「ワンワンワン！！！」

「てめえ、今の事態わかってんのか！！！？？」

「ハハハハハ！！！」

俺は思いつきり爆笑した。ルフィはやっぱり面白いなあ。

「くそっ…血が足りねえ…」

「犬め…！！！」

「あんた達…こんな道端で何やってんのよ？」

俺の背後で声がしたので、振り返るとナミがいた。
くそっ！！やっぱりおっぱいが小さい！！！！

「ルフィ、この女誰？」

やっぱりこう言っという方がいいよな？

「ああ！俺たちの航海士だ！！」

「へ？そうなのか？？」

「誰がよ！！！！！！」

来た！初のナミのツッコミ！！

やっぱり生は違うな！！！！

「そういうあんたもこいつの仲間なの？」

「え？あ…ああ…」

「フーン。あ、これ鍵！」

——キン！！

ナミは地面に鍵を投げた。

「あ！これ檻の力ギか！？」

「まあね。我ながら馬鹿だと思ったわ…。他に海図も宝も何一つ盗めなかったもの…おかげで」

「はーっ！ホントどうしようかと思ってたんだ！この檻！」

「…は…これで一応逃げた苦労が報われるな…」

よく考えたら俺の技で檻をぶち破ってもよかったな。

——パクッ！ゴクン…

「あ…」

「な…」

「い！？…」

「ちょ…」

なんと横に居たシュシュが鍵を飲み込んでしまった。

「この犬う！！！！吐け！！！！今飲んだの餌じゃねえんだぞ！！！！」

怒ったルフィはシュシュの首を絞めた。

おいwやりすぎじゃねえか？

「くおら！小童ども！！シュシュをいじめるんじゃない！！」

「シュシュ？」

「誰だ！オッサン？」

「わしか？わしはこの町のおきさなからの町長じゃ！！」

町長……ブードルか……。懐かしい！！

「時に小童ども……お前！！なんと云う怪我じゃ！！」

「あん？ああ…これか…」

「今すぐわしが医者連れて行ってやる！！」

「あ、俺もついていくぞ！！」

町長は医者連れて行きたかったみたいだが、ゾロはすぐ隣にあった町長の家のベツトで休むことになった。レオンも家に行けば酔い

止めがあると考え、町長の家に行った。

「町長さん、この犬…シュシュって名前なの？」

「こいつ、ここで何やってんだ？」

「店番さ。わしは餌をやりにきただけさながらなんじゃ」

「あ！本当。よく見たらここお店なんだ。ペットフード屋さんか…」

【ブードルの家】

「がーっ！がーっ！…」

「しかしよく寝るなゾロは…ん？もしかしてこれか？酔い止め…8錠か…。きつちり貰うぜ！町長！」

レオンは引き出しから酔い止めの薬を取り、ポケットに入れた。

「さ、ルフィのそこへ戻るかな」

——ゴオオオオオ……！！！！！！

レオンがペットフード屋へ戻ってみると、炎上していた。その光景を見ながらシュシュは吠え続け、ルフィはただ立ち尽くしていた。

「ワン！ワンワン！！！」

「おい…ルフィ…これは…」

「あの着ぐるみがやったんだ……」

着ぐるみ………？モージか！そうか！すっかりこの展開忘れていた！！

「…探してくる」

「加勢するぞルフィ。まだ休んでばっかで暴れてねえしなここ来てから」

俺とルフィはすぐにモージを見つけた。

あんなわかりやすい姿した奴、そうそういないからな。

「……？てめえはさっき…確かに殺したはずだろう！？」

「につ！あれぐらいで俺が死ぬか」

「そうだな。ルフィはゴム人間なんだから」

「ん？…青い髪の小僧…？てめえは誰だ？？仲間か？」

「ああ」

しかし、ホントに着ぐるみみたいだな。

「フン！！また俺の前に現れるつても馬鹿な奴だ！今度こそ噛み砕いてやれ！リッチー！！」

リッチーか…。こんなライオンいたな。

リッチーはルフィに飛びかかろうとする。

「ライオンなんかには俺が負けるかつ！」
——ぎゅるるるるる

ルフィは両腕をぐるぐる巻きにして、リッチーをつかんだ。

「な、何だあれは！！？手が！！！？？」

「ゴムゴムの……槌イ！！！」

リッチーは顔面から地面に突っ込んだ。

「リ……リッチー……！！？？な、なんなんだ！お前は！！」

「俺は昔……ゴムゴムの実を食った……！」

「ゴ、ゴムゴムの実！？まさか貴様船長と同じ悪魔の実の能力者……」

「だから俺がさっき言っただろ？ゴム人間つてよ」

俺はルフィより一歩前に出て言った。

「よ……よしっ！お前らにはな！好きなだけ宝をやろう！そ、それと！ここはひとつ穩便に謝ろうと思う！ご、ごめんなさい！！！」

「……」

ルフィは沈黙して一歩引いている。

「……聞こえないなあ……着ぐるみ君。………シュシュの宝のペットフード屋……丸こげになつてるぞ今頃……」

「だ、だから謝ってるじゃないか……！！」

「だから今度は俺がお前を丸こげにしてやるよ……！！！！」

「へ……？」

強くそう言い放ったレオンは右手を出し構えた。

「ザケル!!!」

——バリバリッ!!!ドオン!!!

「あ…あがが…」

——ドサッ!!

ザケルをもろに喰らい、レオンの宣言通りに丸こげになったモージはあっけなく倒れた。

「いつちよ上がり…っ」と

「…!!すっげーな!今の…!!どうやったんだ!？」

「ん?へへ!!すげーだろ!?!どうやったっつってもなー…俺しかできないぜ?」

そうか。ガツシュの呪文はまだ見せたことなかったな。

「さ、いこうぜ、ルフィ」

「あ、あいつのアレもって行ってやらねーと…」

「(あれ…?ああ…餌か…)そうだな!」

【To Be Continued】

無謀っ！！

丸こげになったペットフード屋の前で立ち尽くしているのは、ナミと町長のブードル。

もちろんシュシュも一緒だ。

「どいつもこいつも…海賊なんてみんな同じよ……！！人の大切なものを平気で奪って！！」
「……」

ナミは表情をしかめ、町長は黙ったままだ。

「ん？」
「お……」

俺とルフィがペットフード屋に戻ると、ナミ、町長、シュシュがいた。

しまったなあ……。この展開知ってるんだから、俺が残つとけばよかった……すまないシュシュ。

「……あら、海賊…あんた達生きてたの？てつきりライオンに食べられちゃったのかと思つたわ」

ナミは鋭い眼差しで俺たちを見てそう言う。こえーな。

「おい…何を言い出すんじゃ…？」

「あんたらが海賊の仲間を集めて町を襲い出す前に私がこの場で殺してやるつか……！！」

「おいやめんかつ小娘」

暴れ出すナミを町長が抑える。

「……お前なんか俺がやられるか」

ルフィは舌を出して言った。

「何っ！！？？よし、やっтарうじゃないの！！！」

「あのなあ……。俺たちは別に町を襲ったりしないって」

ため息をひとつついた後、俺は呆れたように言った。

「そんなこと信じられるわけないでしょ！！あんた達は海賊なのよ！！しょせ……」

ルフィがシュシュの前で餌を置いた瞬間、ナミの荒々しい動きがピタリと止まった。

「これしか取り返せなかった！！あと全部食っちまいがってよ！」

「あいつ……」

「小童……」

ナミも町長も表情が緩んだな。

しかしやっぱりナミは怒ったら怖いな……。今はどうでもいいか。

「よくやったよお前は！まーみちやいねーけどな！だいたいわかる！！！」

シュシュは餌の入った袋を口にくわえ、ルフィの方を見て『ワン！

！』と吠えた。

『ありがとう』ってことなのかな。

「おう！お前も頑張れよ！！」

「シユシユーっ！その怪我ちゃんと治してもらえよ！！」

俺も一言付け加えた。

「ワン！！！！ワン！！！！」

「ハハ……」

俺がもう一度ナミを見たら、笑ってた。良かった良かった。

「ねえ、あんた達……」

「「ん？」」

「どなつてごめん！！」

ナミが俺とルフィに謝ってきた。俺は事情知ってるから別にいいつてのに。

「いいさ別に。お前は大切な人を海賊に殺されたんだ。なんかいろいろあったんだろ？聞きたきやないけどさ」

「……」

ナミの表情がまた緩んだ。うっん……。優しい顔はやっぱ可愛いのかな。

「ぬぐぐぐ……わしはもう我慢できーん！！！！」

「「「え!?!」」」

いきなり町長が叫ぶもんだから、つい俺も驚いてしまった。

「シユシユや小童どもがここまで戦っておるというのに、町長のわしなぜ指をくわえて町を消されるのを見ておらねばなんのじゃ!?!」

「ちょ…ちょっと町長さん落ち着いて!」

「男には!!退いてはならん戦いがある!!違つか!!」

「ああ!おっさん!!」

「のせるな!?!」

ルフィの単純さに、ツッコむナミ。

「己の町を守れずに、何が町長か!?!わしは戦う!?!」

右手に槍を持っている町長は、空に向かって高らかに宣言した。

よく言った!町長………ん?…このにおい……!!!そ、そうか!!!

「おいみんな!!伏せろおーっ!?!」

「「「!?!?!」」」

「撃て!特製バギー玉あ!?!?!」

——ドゴゴゴオオン!?!?!?!

「うわっ!」

「……!?!」

「きゃ!」

「ぬあっ!」

バギー玉……そうだった…。

今の砲弾で町にある家のほとんどが吹っ飛んだ。もちろん俺たちも。

「んぬ…わしの家がぁ…」

「あー！ゾロが寝てんのにー！」

「死んだか…腹まきの小童…」

「いや…生きてるよルフィ」

俺は宣言した。というか展開を知ってますから。

「あー…寝ざめのワリイ目覚ましだぜ…」

家のガレキからゾロがひょこつと出てきた。

「ゾロおー！」

「何で生きてられるのよ…」

うんナミさん。それには同感。

「！…おのれこんなことが許されてたまるか…いざ勝負ー！」

「ちょ、ちよつと待って町長さん！ー！」

さつきとは逆に、今度はナミが町長さんを抑えようとしている。

「離せ！娘ー！」

「あいつらのとこへ行って何ができるのよー！！無謀よー！！」

「無謀は承知！ー！」

「！」

凄い覚悟だ町長。男はこうでなきゃな。

「待つておれ！！道化のバギー！！」

「行っちゃった……。でも町長さん…泣いてた…」

「そうか？俺には見えなかった」

「へえ。なんだか盛り上がってきてる見てえだな」

笑いながらゾロは言う。

「ししし！そうなんだ！！」

「道化のバギーね…どんな奴なんだ？」

念のため、俺はゾロに聞いといた。

「デカツ鼻はなのピエロみてえな野郎だ」

「ハハハハ！！そりゃ楽しみだ！！」

「ししし！！」

ヤバイ…顔は知ってんのに、笑えてくるw

「笑ってる場合か！！」

「大丈夫！俺はあのおっさん好きだ！！絶対死なせない！」

「どっからそんな自信がわくのよ！！」

「俺たちが目指すのは“グランドライン”これからその海図をもつ一度奪いに行く！！仲間になってくれ！海図もいるんだろ？宝も」

ルフィはナミにスツと右手を差し出した。

それに答えんとばかりにナミは左手でルフィとハイタッチをした。

「…私は海賊にはならないわ。手を組むって言うてくれる？お互い

の目的のために」

【バギー海賊団のいる酒場】

「2発目ーっ！！！」

バギーは2発目の砲弾を放とうとしていた。

「準備できました！！」

「よし撃……」道化のバギー出てこおい！！！！」

バギー達の前に現れた町長の表情は怒りに満ちていた。

「……？何だあ？あいつは……」

「あんたも行くの？お腹の傷は？」

「治った」

「治るかつ！」

俺たち4人はバギーを倒すため、海図を奪うため、もう一度バギーのところへ向け歩きだそうとしていた。俺はまだバギーに会ってないけど。

「腹の傷より、やられっぱなしで傷ついた俺の名の方が重傷だ」

「さて…本格的に暴れてやっか。行こうか船長」

「ああ！行こう！！」

「はぁ、呆れた…」

俺たちは戦闘態勢に入った。

さぁ、久々に暴れてやるぜ！

【T o B e C o n t i n u e d】

V S！バギー海賊団

バギー一味が占拠していた酒場に、町長のブードルがやってきた。

「貴様、何者だ？俺を呼んだか？」

「わしはこの町の長さおきながらの町長ブードルじゃ！ー！わしと勝負しろ！ー！」

「ぷーーはっはっは！ー！船長と勝負だと！ー？勝てるとでも思ってたのか！ー？」

手下達はブードルをあざ笑う。

「バギー船長」

「なんだカバジ？」

「ああいう輩は私にお任せを」

一輪車に乗っているこの男は、口から剣サーベルを出し始めた。

「「「「おおお！ー！カバジさんの曲芸ショーか！ー！」「「「「」

男はクルクルつと宙を飛び、一輪車で柵の上に乗った。

この男こそ、バギー海賊団参謀長の“曲芸のカバジ”である。

「最近どうも…腕がなまってましてね…」

カバジは剣の上でコマを回している。

「「「「うおお！ー！ー！やっちまええ！ー！ー！カバジさん！ー！」「「「「」
「バカ野郎、ご指名は俺だぜ。下がってろ」

「……」
「……あゝせつかくカバジさんの曲芸ショーが見れると思った
のよ」「……」

楽しみがなくなった手下たちはブーブー言い始めた。

「おい、貴様。何のためにこの俺に挑む。名でもあげてえか？」

バギーはビシッとブードルを指差した。

「バカ言え！！我が町を！！“宝”を守るためじゃ！！！！」

「……は？……バカかテメエは！！！！宝つてのはな！金銀財宝のこ
とを言うんだ！！町が宝だと！？？戯言抜かすな！！」

「……ほざけ！小童！！貴様なんぞにわしの町への想いをわかっ
てもらうなど、ハナから思っておらんわ！！」

「何イ？？」

ブードルは鬼の形相でバギーに怒声を浴び続ける。

「さっさと降りてこい！！」

「降りてこい……？やなこった！！」

——ヒュッ！ガシッ！！

バギーはバラバラの実の能力で、ブードルの首を締めた。
徐々にブードルの体は浮き上がっていく。

「……ひゃっはっはっは！！やれやれえ！！船長！！！！」

「な……なんのこれしき！！」

「いてえな畜生！！バカか！！自分の喉ごと殴るとは……！！」

「がっ……がっ！！」

ブードルは自分の首を絞めているバギーの手を殴り続ける。

「降りてこいだと…誰に口きいてんだ！！？ああ！？オヤジイ！！俺が誰か言ってみろ！！」

「か……かつ……」

「俺は後に“グランドライ^{のち}ン”を制し！全世界に派手に輝く財宝をすべて手中に収める男だ！！世界の宝は俺の物！！自惚れんなあ！！………ん？…！！麦わらの男っ！！」

右手に違和感を感じたバギー。いつの間にかルフィが右手をつかんでいた。

「約束通りっ、お前をぶっ飛ばしに来たぞ！！」

「よくも貴様らのこのこと自分から…現れたな！！」

——パシッ！

バギーは離れていた右手を自分の体へと戻した。

おー！！あれがバギーか…。やっぱ原作通りすっげえ鼻！！生は違うねえ…。

「何しに来た小童ども…余所者は引っ込んでおれ…これはわしの戦いじゃぞ！！手出しは無用じゃ！！」

——ガン！！！！

「！！！？？」

俺の横で、ルフィは町長を思いつき壁にたたきつけた。
まあ、邪魔だったし妥当だな。

「な!!!?」

「…は？」

「…」

ナミとバギーは啞然としてる。ゾロは納得した表情だな。

「あ、あんた！なんてことすんのよ！！何で町長さんを…」

ルフィは手をパンパンとはたいている。しょうがない俺が言うてやるか。

「邪魔だったからだろ？町長、間違いなく死に行く気だったぞ。気絶してた方がよっぽど安全だ」

「だからって無茶すな！！！」

おー！初めて俺、ナミにツッコまれたんじゃない？
いや、今はいいか。そんなこと。

「スウ~~~~…デカツ鼻あ！！！！！！！」

「~~~~！！！！！！~~~~」

「え？…えええ！???」

「な…ルフィ…」

「ハハハ！！！」

つい笑っちゃったが。

ルフィ…そんな大声でバギーのコンプレックスをww

「ハデに撃てえ！！バギー玉あ！！！！！」

「何言い出すのよお！！！」

「おい！ルフィ、レオン！逃げるんだ！吹き飛ばぞ！！！」

ゾロとナミは逃げ出そうとしてる。よし！

「ルフィ！！俺に任せろ！！」

「ん？いいけどよ、何かあんのか！？レオン」

「ああ！！」

ルフィにそう宣言して俺は、一歩手前に出た。

「消し飛ばえ！！！！」

——ドゥン！！！！

砲弾が飛んできた。そんなもんが俺に効くか！！！！
両手を前にかざして…

「ラシルドオオ！！！！」

——ズドオオン！！

俺がガツシュの第2の術を叫ぶと、目の前から巨大な長方形の盾が出てきた。

「うおおお！！すっげえ！！！！」

「レオン…あいつ何者なんだ！！！？？」

「…！！！？？」

「な、何だあいつは！？バギー玉を…跳ね返しやがったあ！！」

よっしゃ！うまくいった！！

返してやるぜ、お前らの砲弾。しかも電撃のおまけつきだ！！

——ドガアアン！！！！！！

「すっげえなあ！！！レオン！！！」

「お前…一体何なんだ！！！」

ルフィ…目が星になつてゐるww

ゾロは驚愕してゐるな。

ナミは…まだ驚いてゐる。

「何なんだって言われてもなあ…」

何て言えばいいんだ？悪魔の実じゃねえしなあ…。

「生まれつき使えるんだよ。こういう力を。あ、悪魔の実じゃねえからな？」

「じゃあなおさらスゲエ！！！」

ルフィ、まだ星になつてゐるぞww

まあ、こう言っしかねえよな。

「な…何なの？？」

「え？…だから“ラシルド”だ！」

「それが何かって聞いてんのよ！！！！！」

「だから生まれつき使えるんだって！！！」

——ガラガラ…

「あ…」

…やっぱ倒れてねえか…。

案外いけると思つたんだが。

「仲間を盾に…」

ナミが言う。

仲間を盾にか…相変わらず外道一味だ。

「よくもまあ…ハデにやつてくれたもんだ…」

「旗揚げ以来の屈辱ですね…船長…」

「ああ…俺あもう怒りで声も出ねえのよ…」

これで二人か…。

「もう一人仲間がいたとはな…貴様あ！！何者だ！！？」

ん？バギーが俺に絡んできた？

「何者？お前ら外道に教える義理はないはずだぜ？」

「…小癪な…」

カバジが呟いた。

「バギー船長…ここは私にお任せを！」

「ああ…行け！カバジ！！」

来るか！ここはゾロがやるんだっけ？

まだゾロの戦いっぷりを見てねえしな。観戦しとこう。

「バギー一味参謀長！“曲芸のカバジ”！一味の怒り！この私が請け負う！！」

一輪車に乗ってきやがった。すげーな、俺は乗れねえぞ。

——ギン!!

カバジの攻撃をゾロが受け止めた。自分の刀で。

「剣の相手なら俺がする!!」

「光荣だねえ… ロロノアゾロ… 一人の剣士としてお前を斬れるとは…」

「…!! おい休んでろよ、ゾロ。俺たちがやるから」

ルフィはゾロの腹の傷を見ながら言った。

「曲技! 火事オヤジ!!」

カバジは口から火を吹いた。
まずいつ!

「うわっ!!」

——ビュ!!

「あっ」

「うっ…」

ルフィは焦り、ナミは目を閉じた。
こういう時は女子だな。ナミはw

——ドスツ!!

「ぐわああ!!!!」

カバジの蹴りがゾロの腹の傷に入った。
うわっ… 痛そう。

「くそっ!!」

「何だ?…そんなに強く蹴ったつもりはないが?」

「汚い奴!!あいつ…傷口を狙って…!!」

傷さえなけりゃ、ゾロも簡単に倒せるんだろうけど……な!!??

「うわ!!」

「きゃ!!」

「…!!?」

俺とルフィとナミがゾロの戦闘を観戦していたら、バギーの居る方向から斧が飛んできた。

な、なんだ!!?!

「起きたか…タウルス…」

「おお。バギー船長」

「なんだあれ!!?馬!!??」

な、何だ!!?あの馬見てえな顔の奴は!!あんな奴原作に居たか!!??

……いや…いるはずねえ!!

レオンたちの前に突如姿を現したのは、顔は馬だが体は人間のようなムキムキな体をした…この男…

バギー海賊団用心棒、“剛腕のタウルス”だ。

——ドシン!!!

タウルスとかいう、何かよく分からん筋肉馬野郎は、俺たちの前に飛んできた。

「タウルス…。貴様に口ロノアは渡さんぞ？」

「構わないさ。俺っちはあの青髪の小僧をやる！！」

青髪の小僧って…！？俺か…！？

「ルフィ…ちょっと離れててくれるか？」

「…おしきた！」

「な、何なのよ…次から次へと…」

ルフィとナミは俺とゾロから離れた。

「来いよ馬野郎！！相手してやる！！！」

「げしし………」

【To Be Continued】

青髪のレオンVS剛腕のタウルス

オ…オッス…!

俺も知らない突然の謎キャラ登場で驚いている！
何で！？俺が介入したからか？

「げしし…」

「何なんだお前は！！お前かさつき斧ぶん投げてきたのは！！」

「俺たちはバギー海賊団用心棒のタウルスだ！！そうだ！！さつきの斧は…俺っちが投げた！！」

やっぱりか。物騒なもん投げやが…！！？

——ドオン！！

「がはっ…!!」

「げしし…ぼさつとしてるからだ…」

レオンはタウルスに殴られ、吹っ飛びそのまま民家にめり込んだ。

「レオン…!!」

「ああ…見てるだけで倒れそう…」

ナミは頭を押さえた。

一方、ゾロはカバジとの熱戦を繰り広げていた。

「ロロノア・ゾロ！討ちとった！！」

カバジは一輪車を漕ぎながら剣をゾロに振りかざす。

——ガキン！！

「ぬがつ!？」

「え……」

「おお!ゾロ!！」

向かってくるカバジを、ゾロはを拳で殴り飛ばした。

「!?!?？」

「うつとしい野郎だぜ……そんなに俺の腹の傷をつつくのが楽しいか
!?!」

——ザクッ!!

ゾロは自ら腹の傷を斬った。

「な!?!?!自分で!?!?」

「!?!」

「いてえ!?!」

「げし!?!」

「!?!」

カバジ、ナミ、ルフィ、タウルス、バギーは驚愕する。

「フウー!?!俺の剣が目指すのは世界——」

「貴様何を……?」

「ハンディはこれくらいで満足か??俺とおまえの格の違いを教え
てやるよ」

「おおー!?!かっこいい!?!」

「……これがロロノア・ゾロか……。なめやがって!?!」

「カバジ!タウルス!?!さっさと片付けろ!?!」

「……お任せを!?!」

「おおおお!?!」

フ…これからだよ馬！！

「げし…！？」

——ボオオン！！

ガレキから出てきたレオンは、高速パンチをタウルスに浴びせた。タウルスはそのまま酒場の裏まで吹っ飛んだ。

「ルフィ！あの馬は俺に任せて、後の2人はお前たちに頼んだぜ！！」

「おう！まかせろ！！」

そうルフィに伝えたレオンは、タウルスが吹っ飛んだ酒場の裏に向かって行った。

「ん？ナミは？」

【酒場の裏】

「冗談じゃない！あんな奴らと一緒に居られますかっての」

一人抜け出したナミは、バギーの宝を奪うため酒場の裏に来ていた。

「えっと…確か……え！？」

——ドオオオン！！

「きゃ！！？？な、何！？」

吹っ飛んできたのは、さつきレオンに殴り飛ばされたタウルスだった。

「こ、こいつ…さつきの馬男！！」

「くっ…くそ…あの青髪小僧…俺っちをふつとばしやがって……ん？お前は…さつきの女か！！…何をしている！！」

「な、何って…あんた達の宝を奪いに来たのよ！！…私は海賊専門の泥棒よ！当然でしょ！？」

「げしし…宝を奪おうとしている奴を見逃す海賊がどこにいる…」

「おい！！馬！！お前の相手は誰だ？？俺だろっ？」

ナミとタウルスの背後に、レオンが堂々とやってきた。

「あ、あんた…何で立ってるのよ？？」

「ナミか。早くこっから立ち去った方がいいぜ。こいつ、想像以上に馬鹿力だからな」

「わ、分かってるけど…私、あんたに名前乗ったかしら？」

そう。ナミはまだレオンの名前で自分の名前を名乗っていなかった。

「…！！いいいじゃねーかそんなこと！それより逃げとけて！！」

「ふん…て、言われなくてもそのつもりよ！！」

——ダッ！！

やベーやベー。つい墓穴を掘っちゃった。

「行っただか…。さあ続きを始めようか？馬野郎」

「さっきから聞いていればお前…俺っちを馬・馬と……生まれつきこの顔だ！」

「じゃあ、なおさら馬だ！！」

「グググ…ぶっ殺す！！！」

「…！！」

その頃ゾロとカバジの戦いは終わりを迎えようとしていた。

「くっ…！」

「チッ…はずしたか…」

ゾロは、カバジの上からの攻撃をギリギリでかわした。

「ハアハア…もういい……。疲れた…」

ゾロは地面に座り込みそう呟いた。

「疲れたー？くくく…さすがに貧血気味か？とうとう勝負を諦めたな！まあ、当然と言えば当然！その深傷ふかででよく今まで立ってられた…」

——ガシャン！！

「…！！！！？」

ゾロはすぐさまカバジを蹴り倒した。

「く……!!」

「お前の下らねえ曲技に付き合うのが、疲れたって言ったんだ!!」

ゾロは鋭い目つきでカバジを見て言う。

「……!ならばとどめを刺してやろう!!俺の本物の剣技で!!」
「……!!」

ルフィとバギーは黙って見続けている。

「鬼……」

「死ねーっ!!!!」

「斬りっ!!!!」

——ズバンッ!!

ゾロの必殺技、“鬼斬り”が華麗に決まった。

「カバジ!!!!」

「おしっ!!」

「……クソ……我々バギー一味が……コソ泥ごときに……ここまで……」
——ドサッ!

「コソ泥じゃねえ……海賊だ!!!!」

ゾロはかぶっていた手ぬぐいを外し、その場に倒れこんだ。

「ルフィ……俺は寝るぞ」

「おう寝てる。後は俺がやる」

「……いいのか麦わらぁ?もう一人の小僧の心配はしないで……」

「ん?レオンか?あいつなら負けねえもんよ」

【酒場の裏】

「おらぁ！……！」

「よっ！……どうした！？あたらねえぜ？？」

レオンVSタウルの戦闘はすでに始まっていた。

しかし勝負は先ほどからレオンがタウルの斧を紙一重ですべてかわしている。

「バカな……俺っちの斧が当たらねえ……」

「お前は確かにパワーはすげーけどよ、反対にスピードが殺されてる！そんなんじゃ永遠にお前の攻撃はあたらないぜ！？」

「う、うるせーっ！！俺っちの斧は無敵だ！！！」

——ヒュッ——

タウルスは思いっきり斧を振りかざしてくるが、前にレオンは居なかった。

「……！？……消えた……！？？」

「こつちだぁ……！」

レオンは自慢の飛躍力で、はるか上空まで飛んでいた。

「な……あんな上に……！！いつの間に……？？」

「喰らえ……！！さんこんてっそう散魂鉄爪……！！」

——ドオオン……！！——

空中からの超スピードで速さをプラスしたため、レオンの攻撃は地面をえぐるほどの威力を誇った。

——タツ——

「ふう…確実に命中したな。終わったか??」

——ズオオ——

「……あぶねえ——」

レオンはしゃがんで攻撃をかわした。

「…またあの斧が飛んできた…。てか、斧にチェーンついてたのか……」

「げしし…俺っちのタフさをなめちゃいけないぜ——」

「何!??」

あいつ…。俺の技を上からまともにくらったのに、…ピンピンしてやがる!…しっかり爪の後もあるが…。

序盤でこんなタフな野郎がおでましかよ!?!…くそっこうなったらあの爺にいつぺんいろいろ聞かないとな!…何がどうなってんのか…。爺に会う方法なんてシラネえけどな——!

「どりゃあ————!」

「ちっ——!」

タウルスは斧をブンブン振り回し始めた。それをレオンは三度紙一重でかわす。

「こうなったら…そのチェーンをまず斬ってやるぜ——!」
——ズバツ——!

「な……!!俺っちの斧が!!」

レオンは武器の鉄砕牙でチェーンを斬った。

「めんどくさいから一気に決めるぜ!!」

「く……!!」

…鉄砕牙…思ったより軽いな……。

ん!これは鉄砕牙の妖気か!?やっぱ、妖気なんてあのか!!すげえ!!

「ちくしょー!!お前のような小僧に俺っちが負けるかあ!!」

「死んで念仏でも唱えな!!喰らえ!!風の傷!!」

——ドオオン!!

「な、なんだ!!??うわああ!!」

——ザアアアン!!

鉄砕牙から出た強力な衝撃波がタウルスを一撃で粉々にした。

「よしっ!!」

レオンは刀を鞘にしまい、フウッと息を吐いた。

鉄砕牙!!さすがにすげー威力だ!!

だがそう易々と使えないな。相手が粉々になっちまうw

笑顔のレオンはその場を後にして、ルフィ達の元へ向かった。

さて…ルフィ達は決着がついたところかな??

【To Be Continued】

決着。

タウルスとかいう何かよく分からん馬野郎を消し飛ばした俺は、ルフィ達のところへ向かっていた。
着いたっ！

…あ！宝が散らばってる！！バギーも倒れてやがる。もう終盤だな？

「命中っ！！今のとどめは町長のおっさんの蹴りだと思え！」

「……ありがとう。助かったわ」

「うん。気にすんな」

「終わったか？ルフィ」

様子を見てから俺は、ルフィのそこへ駆け寄った。

「ん、レオン！！今片付いたとこだ！あ、そうだ海図！！」

「ああ！私の宝が散らばってる！！」

ルフィはバギーの近くに落ちてあった、紙を取った。あれは海図だな。

「よし！手に入れたぞ！グランドラインの海図！！」

「おい……！待てゴムゴム！！」

「げっ、まだ生きてる！」

ルフィ、殺すつもりだったのかww

「……！！」

「貴様を殺す！集まれ！バラバラパーツ！！」

——バシバシバシ！！

「あれ!!?」

バギーの体に戻ってきたのは手と足だけだった。
あんなになるのかw

「探してるのはこれ？」
「うげっ！俺の体達！！」
バートン

バギーのバラバラの体のほとんどが、ナミによってロープで結ばれ、
一つになっていた。

「ッハッハッハ！！ご愁傷さま。でかつ鼻船長！」
「ししし、さすが泥棒！後は俺に任せろ！」
「びよーん！」

ルフィは両手を後ろに伸ばした。

「吹き飛ばバギー！ゴムゴムの……」
「やめろあああああ！！！！！！！！」
「バズーカアア！！」
「ズドオオン！！」

あら。よく飛ばもんだね。

俺は吹っ飛ばんだバギーに手を振った。てかあいつの技一回もみなかったなw別にいいけどさ。

「勝った！！」
「やったな。ルフィ！」
「ああ！これでナミも仲間になるもんな」
「手を組むの！別にいいわ。あんた達と居ると儲かりそうだしね」

「いくら分ぐらいあるんだ？その宝」

俺はナミに聞いた。

「そうね、これだけあれば一千万ベリーはくだらないはずよ」

「そりやすげえな。それでごきげんなのか」

俺がルフィに目をやると、ルフィはボロボロになった麦わら帽子を持っでじつと見ていた。

「あれ？帽子ボロボロじゃねえーか」

「そんなに大切なの…？その帽子…」

「ああ。でもいいや！まだかぶれるし！バギーもぶっ飛ばしたから気はすんだ！」

気の毒になルフィ。まあでも、ナミが直してくれるだろ。

「おい！ゾロ起きろ！行くぞ！」

「…ん？」

ルフィは寝ているゾロの頭をパンパンとたたく。

「……！カタはついたのか？」

「ああ。海図も宝も航海士も手に入れた！」

「後はこの町を出るだけだぜ」

「そうか…。あゝダメだ歩けそうにねえ…」

ゾロは頭を押さえる。まあ、結構傷が深そうだもんな。

「当たり前よ。それで歩けたら人とは認めないわよあんだ達二人も」

「何で俺たちも入ってんだ」

レオンとルフィは口をそろえて言う。

「あんたらが一番疑わしいのよ!!!」

それに対しナミは突っ込む。

犬夜叉の体だからな…。よっぽどのことじゃない限り痛みを感じなくなっただよな。正直。

「おい。町長も起こさないといけないんじゃないの？」

「あ、そっだ！」

「君達……」

俺たちが町長を起こそうとしたら、背後から男の声がした。
ン…？この人らは町の奴らか？

「俺たちは町の住人だ。海賊たちの仲間割れでも起きたのか？何か知っていたら教えてくれ」

「なんだ…町の人か。まだ仲間がいたのかと思ったわ」

ナミは安心してフウッと息を吐いた。

「教えると言われたら教えないこともないんだけど……「あ!!町長!!」」

住民の一人が、大声を張る。倒れている町長に気付いたらしい。

「なんて事だ!しっかりしてください!!」

「くそ一体ここでなにがあつたんだ!!」
「海賊たちの仕業に違いない!!」

住民は一斉に町長の元に駆け寄り、体を起こす。

「あ、ごめん! そのおっさんは俺がぶつ倒した」
「何!!??」

おっと。

この展開はやばい展開じゃないか? 住民たちが一斉に武器を取ったぞw

「お前ら! うちの町長をこんな目にあわせといて! ただで済むと思うなよ!」

「言い訳は聞かんぞ!」

「何者だ! まさか海賊か!？」

「海賊だ!」

「やっぱりそうか!!」

「……」

「ハハハハ!!」

ナミは呆れ、ゾロは笑っている。

うそーんルフィ。単純すぎにもほどがあるww

「バカッ!!!!」

「だってそうだろ!」

「これは……ヤバいな。行くぞルフィ!」

「おうっ! 逃げろ!!」

「もっつ!」

「追ええ!!!!」

俺はゾロを担いで、ルフィとナミはそれぞれ宝の入った袋を持って
すぐさま逃げ出した。

「絶対逃がさんぞ!!」

「町長の仇を取ってやる!!」

住民は必死に追いかけてくる。

「何であんたは話をややこしくすんのよ!!」

「いい町だな!」

「え?」

「確かに。町長一人のためにあんなに怒ってるんだぜあいつら。
どんな言い訳しても許してくれねえだろうな!」

「……!!」

俺たちは狭い路地へと逃げ込んだ。

「ワン!!!!」

「シュシュ!!」

「犬!!」

すると路地にはシュシュがいた。どうやら住民たちを追い払って
いるらしい。

「グルルル……ワンワン!!!!」

「どうして邪魔をするんだ!シュシュ!!あいつらは悪い海賊
なんだぞ!!」

「ワンワン!!!!」

「シュシュ!!そこを通せ!!」

「につ…」

俺がルフィを見ると、笑っていた。
あんときの恩返しかな。チョッパーがいたら翻訳してほしいぜ。じやあなシュシュ。

うまく逃げた俺たち4人は、船がある海岸へ来ていた。

「はぁー怖かった。シュシュのおかげで何とか助かったけどさ。何で私たちがこんな目に会わなきゃいけないの？」

「いいだろ別に。俺たちの用はすんだんだし」

「それもそうだな。シュシュにも感謝しねえと」

「そりゃそうだけどさ」

「ん？これお前の船か？」

「お、わりとでかいな」

「いーなー！かつこいいーなー！」

「私はそうは思わないけど…馬鹿な海賊から奪ったの」

俺も決してかつこいいとは思わないが…。俺たちの船よりマシかwん？

「待ってたぜえ！泥棒女あ！！」

俺たちの船から現れたのは、最初に会ったザコ3人組だった。まだいたのか。

「あ…あんだ達は…」

「知り合いか？」

「まあ、ちよつとね」

「ちよつとじゃねえ！！！！因縁の仲さ！！」

因縁って…。そんな大げさなもんじゃないだろ。

「仲間もいたのか…。一緒にお仕置きしてやんねえとなあ…。なあ、おい、てめえシカトしてんじゃねーぞコラ」

真ん中に居た男は俺の背中に乗っている、ゾロの頭をパンパンたき、挑発した。

「ああ！？」

「「「！！！！？ぎいやゝゝ！！！！」」」

ザコ三人組はゾロにビビり、海へ逃げ出した。

ていうか、何で俺とゾロの顔を忘れてんだよw会って間もないだろw馬鹿なのかあいつらw

*

帆を張り、俺たちへ再び海へ出た。

「よし行くか！！」

「お前その帆、バギーのマークついてんじゃねえか」

ゾロがナミに言う。

「だってあいつらの船だもん。そのうち消すわよ」

「おい！……待て小童共！……」

「……ん？」「」

「あ、町長さん」

町長が海岸に現れた。

息が上がってるな。走ってきたのか。

「……すまん！！恩にきる！！！！」

町長は涙を流しながら叫んだ。

「ししし……。気にすんな！楽に行こう！！」

「言葉もないわい……………」

「何ですってえ！！！？？宝を置いてきた！？」

どうやらルフィは、宝の半分を海岸に置いてきたらしい。

「ああ。だってぶっ壊した町直すのに金があるだろ」

「あれは私の宝なの！！」

怒ったナミはルフィを海へ落そうとする。

うつ……やっぱり恐ろしい……。

「やめろ！俺は泳げないんだ！！欲しけりやもっかい行けよ！」
「そんなことできるか！！」
「だはははは！！！」

ゾロは爆笑。

「おいナミ。そのすぐ怒るのやめてくれよ。魔女みたいでこえーよ」
「何ですって！！！？？」

俺のこの言葉がさらに頭にきたのか、俺まで海に落とされそうになった。

おっかねえー！！！！

「ばーか」

「！！！！何だ、笑ってんじゃん」

「うつさい！」

——ゴン！

「効かん！！」

「いや…俺は痛い…」

何故かナミのパンチはレオンには効いたらしい。

〈To Be Continued〉

正義の嘘つき？キャプテン・ウソップ登場！

オレンジの町を出た俺たち4人は、次なる島を目指していた。

俺は町長の家から取った酔い止めを1錠飲んでいたので、対策はバツチリだ。

ちなみにボロボロになったルフィの麦わら帽子は、ナミに応急処置をしてもらっていた。

ルフィは船の船首に、俺とゾロは船でくつろぎ、ナミはバギーの船に一人乗っている。

しかし、ルフィは本当に船首に座るのが好きだなw

「無謀だわ」

ナミが不意に言う。

「何が？」

ルフィが聞く。

「このまま“グランドライン”へ入ることよ」

「確かにな！やっぱり肉がないと力が…」

「食料のこと言ってるんじゃないわよ！」

「それは一理ある。でも俺は焼き魚がいいなやっぱり」

「このまま酒が飲めねえってのもつれねえしな」

「飲食から頭を離せ！！！」

ナミはレオンとゾロに突っ込む。

「悪い悪い。で？何が無謀なんだ？」

しょうがないから俺はナミに聞いた。

「これからのことよ。私達が向かっている“グランドライン”は世界で最も危険な場所なのよ。その上ワンピースを求めている強力な海賊たちがうごめいている。当然強力な船に乗ってね」

あ！

ちよつと冒険気分には浮かれて忘れてたけど、そろそろメリー号イベントか。はやいなあ…。

「船員の頭数にしても、この船の装備のなさにしてもとても無事でいられるとは思えないわ」

「で？何すんだ？」

船首に座っているルフィが、ナミに問う。

「“準備”するの！先をしっかり考えてね！ここから少し南に行けば村があるわ。ひとまずそこへ！

しっかりした船が手に入ればベストなんだけど」

「肉を食うぞ！…！」

「いや、ルフィ！肉よりやっぱり魚だ！…！」

「人の話を聞けえ！…！」

「ぎゃー！…！」

レオンとルフィはナミの鉄拳を喰らった。

ここはシロップ村。村の若者ウソップが海を見つめている。
シロップ村 ウソップサイド

俺は今、海を見晴らしている。
よし！今日もひと仕事するぞー！

「大変だーっ！皆大変だーっ！海賊が来たぞー！海賊
だ海賊だーっ！皆逃げろおー！」

「何！？海賊だと！？」

「お！ウソップが騒いでる！」

「よくやるよなあいつも」

「嘘だあー！わっはっはっはっは！」

おおおお！来た来た来た！村の皆が！逃げるぞー！

「待てーっ！このクソがきやー！」

はっはっは！追いついてみるおー！

*

よしよし！今日も一人残らず騙されたな！
ん？おおー！あいつらー！

「おはようございますキャプテン・ウソップ！」

ウソップの行動に、子分三人が的確に突っ込む。

「キャプテンは本物の海賊になりたいんじゃないんですかっ!？」

「海賊が海賊にビビってどうするんですか!?!」

「そうですよ!?! たった四人の海賊に!?!」

……ん?…四人だと!?

「おい、本船じゃないのか？」

「いえ…小さい船が2隻…」

おお! ビビって損したぜ!!

「よし! 出動だ!?! ウソップ海賊団!?! 村の平和を守るため!?!」

「「「……」」」

「よし! ついて来い!?!」

「「「……は、はい!?!」」」

サイドエンド

俺たちは順調に船を進め、ナミの言ったとおり島に到着した。
やっぱすげーな。ナミの航海術は。

「あつたな!。本当に大陸が」

「何言ってるの。地図通りに来たんだから当たり前でしょ」

「へーっ」

「なあ、この奥に村があるのか？」

「腹減ったぜ。村に行つて魚を食べたい」

「安心して。まあ、小さな村みたいだけど」

「はーっ！久々に地面に降りた！」

最後に地に降りたゾロが、大きく背伸びをしている。

「お前、ずっと寝てたもんな」

「もう、腹の傷はいいのかよ？」

「ああ。完治したよ。…ところでさっきから気になってんだが、あいつら何だ？」

「「「「「！！！！！！」」」」」

ゾロが指をさした先にいたのは、俺たちを隠れて見ていたウソップと海賊団のガキ共だった。

おお！！ウソップ！長え鼻だ…本物は違うな！！

「うわぁ~~~~！！！！！！見つかったぁ！！！！！！」

「オイお前ら！！逃げるな！！！！！！」

俺たちに見つかったガキ達はすぐさま逃げ出した。

おもしろいなw

「……………！！俺はこの村に君臨する大海賊団を率いるウソップ！

！！人々は俺を称え、さらに称え、わが船長、キャプテン・ウソッ

プと呼ぶ！！」

「へえ」

俺は適当に相槌をうった。

ルフィ達は黙ったままだ。

「この村を襲うつもりならやめておけ！！この俺の八千万の部下達がだまっちゃならないからだ！！」
「うそでしょ」

ナミが言う。

まあ、嘘だな。

「げっ！ばれたー！！」

「ほら、ばれたって言った」

「ばれたって言っちゃまったあゝゝ！！俺の策士めえー！！」

「しっしっしっしー！！お前も面白えなーっ！！」

「おいテメエー！！俺をコケにするなー！！」

「ハッハッハッハッハ！！確かにおもしろすぎるよその鼻！」

「いや鼻がよー！？」

レオンとルフィの発言に、ウソップはいちいち突っ込む。

「俺は誇り高き男なんだ！！その誇りの高さゆえ、人が俺を“ホコリのウソップ”と呼ぶほどになー！」

「埃？きたないだろ」

「そっちのほこりじゃねえよー！？」

レオンのボケにウソップはすぐさまつつこむ。

こういう発言からして、レオンもだいぶワンピースの世界に慣れてきているみたいだ。

*

一応、ウソップと打ち解けたレオンたち5人は村にある飯屋に来ていた。

ウソップは中央、左側にナミとゾロ、右側にレオンとルフィが座っている。

ちなみにレオンは秋刀魚の塩焼きを食べ、ルフィは骨付き肉を食べ、ゾロは酒を飲んでいる。

「へえー！！仲間とでかい船か！！」

「ああ、そうなんだ！」

「はーっ！そりゃ大冒険だな！！」

「そうだろ??」

うん。やっぱり焼き魚は最高！

俺はウソップの話を聞きながら魚をほうばっている。

「まあ、大帆船ってわけにやいかねえが、船があるとすりゃこの村で持ってるのはあそこしかねえな」

「あそこって?」

ナミが唯一ウソップの話に反応する。

「この村に場違いな大富豪の屋敷が一軒たってる。その主だお。だが主と言ってもまだいたいけな少女だおがな…。病弱で寝たきりな娘さ

…」

「え……どうしてそんな娘がでつかいお屋敷の主なの?」

「あ！店主さん、秋刀魚おかわり！」

「俺も肉追加っ！！」

「おれは酒っ！」

「てめエら話聞いてんのか!!?」

ウソップは得意げにレオン、ルフィ、ゾロにつっこむ。

「…で、話を続けて?」

「あ…ああ…。もう一年ぐらい前になるかな…。可哀想に病気で両親を失っちゃったのさ。残されたのは莫大な遺産とでかい屋敷と数十人の執事達…。どんなに金があつて贅沢できようと…こんなに不幸な状況はねえよ…」

「…………やめっ!」

ナミは軽くテーブルを叩いた。

「…ん?」「」

俺たち3人はそれに反応する。

「この村で船のことは諦めましょ。また別の村を当たればいいわ」
「そうだな。急ぐ旅でもねえし!肉食つたし!いっぱい買いこんでいこう!」

「もう降りるのか?」

「ところでお前ら…仲間を探してると言っただな…!」

「うん。誰かいるか?」

「俺が船長キャプテンになってやつてもいいぜ!!!」

「…「ごめんなさい」「」」

「はえええなおいっ!」

それは有難迷惑だw

ウソップが船長なぞ、想像もつかんw

ト Be Continued

ウソツキの筋！（前書き）

今回、かなり進んだと思います。

ウソツキの筋！

「『ウソツプ海賊団！！参上っ！！』」

食事を済ませ、俺たちが一息ついていたとき、店内にウソツプの子分達が入ってきた。

俺はデザートにと冷たいバナナアイスを食べていた。

「なにあれ……」

「さーなんだろうなあ……」

ナミは呟き、ルフィはカップでお茶飲んでいた。

「？……おい、キャプテンがいないぞ？」

「まさか……やられちゃったのかな……？」

「お……おい！海賊たち！我らが船長、キャプテン・ウソツプをどこにやった……！」

「キャプテンを返せ……！」

ガキ共が俺たちのところへ近づいてきて、そう叫んだ。

おいおい、叫びすぎじゃないか？ほかの客の迷惑になるだろ。

「はーっ！うまかった！肉っ……！」

ルフィはコップを置き、そう言う。

「『えっ……！？にくって……まさか……キャプテン……？』」

肉だけでウソツプを食ったと思ってんのかw

ナミは笑ってるな。声には出してないけど。

「お前らのキャプテンならな……」

「「「な、何だ？何をした！！？」「」」

「さつき……喰っちまった」

「「「え……！！？」「」」

「しかも丸焼きにしてだ」

ゾロの言葉に、俺はさらに一言付け足した。
これはやらざるをえんw

「「「ぎいやあ……！！鬼ババア！！」「」」

「何で私を見てんのよ……！！」

「「「……！！」「」」

ピーマン達は泡を吹いて倒れた。

しかしナミが『ババア』って……w

「あんたらがバカなこと言うから……」

「「はっはっはっはっは……！！」「」」

*

「「「時間？」「」」

「ああ……そういつてさつき店から出てったぜ」

ピーマン達の話をもとめると、ウソップは病弱な女の子がいるという屋敷に向かったらしい。

どうやら1年前からお嬢様を元気づけるためにウソツキに通っているそうだ。

「もしかして、もうお嬢様元気なのか？」

ルフィはにんじんに聞いた。

「うん！だいぶね。キャプテンのおかげで」

「よし！じゃあやっぱり屋敷に船を貰いに行こう！」

ルフィは高らかに宣言した。ここ店の中なのに…。

「だめよ！さつき諦めるって言ったじゃない！！」

「止めても無駄だつてナミ。ルフィだぜ？」

「……ハア……。わかったわよ……」

レオンの言葉を聞いてナミは諦めた。

俺たちは店を出て、ピーマン達の案内を受け、ウソップがいるという屋敷に向かった。

「こんにちはーっ！船くださーい」

ルフィは挨拶してすぐに、扉にしがみついた。
挨拶した意味がまるでないなw

ピーマン達3人に俺たちはひたすらついて行った。
まあ、ついていなくても俺はウソップの臭いでどこにいるかなんて分かるけどな。

「げっ！お前ら！何しに来たんだ！！」

「この人が連れて来いって……」

「誰？」

「あ、お前がお嬢様か！」

お前って……ルフィ。お嬢様だぞ。

しかし羨ましいなウソップ。こんな可愛い女性に惚れられているとは。ただ初期のキャラクターだから、今のナミ同様、胸が……。オッホン！！失礼！！

「あーこいつらは俺の噂を聞きつけ、遠路はるばるやってきた新しいウソップ海賊団の一員だ！」

「ああ！！……いや違うぞ俺は！！」

しょうがない。俺が言うか。

「頼みがあるんだ！お嬢様！」

「頼み？私に？」

「ああ！俺たちはでっかい船が……「君達！！そこでなにをしている！！」」

ちっ……。クロ……もうきやがったか。

俺が頼めば流れが変わると思ったんだが、変わらなかったか。

「困るね！勝手に屋敷に入ってもらっては！」

「げっ………執事……」

「クラハドール…」

「何だあいつ」

「あのねクラハドール…この人たちは…」

「今は結構！理由なら後できっちり聞かせていただきます！」

めんどくせーな！。こいつ。

この間に念のため、トイレ行っとくか。

「ルフィ。俺ちよつとさっきの店でトイレしてくるよ」
「ん？ああ、わかった」

俺は一人屋敷を後にした。

まだクロの説教が続いてるな。……説教なのか？あれ。

*

ゾロ、ナミ、ピーマン、にんじんの四人は村に戻ってきていた。
柵の上にはナミ、柵にもたれかかっているゾロとピーマンとにんじんの姿があった。

「…ねえ、ルフィとレオンはどこに行ったの？」

「ルフィはキャプテンを追いかけて行っただろ？レオンはさっきの飯屋のトイレの中だ」

「あ！キャプテンならあそこだ！！」

「うん。海岸だ！なんかあるととりあえずあそこにいくんだ」

「「いつてみる？」」

二人はゾロに聞いたが、ゾロは断った。

「それよりあんた達一人たりないんじゃない？」

「ああ。たまねぎ！」

「あいつ、すぐどこかに消えちゃうんだよな」

「うん。そして大騒ぎして現れるんだ」

「たたたた大変だああああ！！！！」

二人の言う通り、たまねぎは大騒ぎ、しかも泣きながら走って向かってきた。

「う！う！う！後ろ向き男だぁぁぁ！！！！」

「なにかあつたのか？」

「泣いてるわよ」

「変な人が後ろ向きで歩いてくるんだよっ！！」

「「うそつけ」」

「ほんとだよ！！ほらっ！あれ見て！」

「「「？」」」

ゾロ達4人はたまねぎが指をさした方向に目をやった。すると、本当に後ろ向き男が歩いて来ていた。

「オイ、誰だ。この俺を変な人と呼ぶのは！俺は変じゃねえ！」

ゾロ達の前に現れた、この奇妙な男の名は催眠術師の“ジャンゴ”だ。

「変よ。どうみても」

「バカを言え。俺はただの催眠術師だ」

ジャンゴは話しながらも、奇妙なポーズは崩さない。

「さ…催眠術!？」

「やってみてくれよ!！」

「うん!やってみて!！」

ここは子供。“催眠術”というワードに食いつく3人。

「バカヤロウ。何で俺が見ず知らずのテメーらに、初対面で術を披露しなきゃならねーんだ!

…いいか?この輪をよく見るんだ」

「やるのか」

「ワン・ツー・ジャンゴでお前らは眠くなる…。ワン…ツー…」

ジャンゴはしゃがみ、チャクラムをゆっくりと揺らしながら3人に見せる。

「ジャンゴ…ZZZ」

「ZZZ…」

「おい!こいつ何なんだ!！」

あるうことが、術をかけたジャンゴ自身も寝てしまった。

「ハア……。さっさとその子達起こして、ルフィとレオンを探しに

行くわよ」

「俺の仕事かよ!？」

噂をすれば、レオンがやってきた。

「ん?何してんだ?ルフィは？」

「海岸よ」

俺の問いにナミが答えた。ゾロはピーマン達を起こしてる。ん!？
あれは…ジャンゴ!何で寝てんだよw

*

10分ほどして、ウソップが走ってこっちへ向かってきた。原作通り、ルフィは居ないな。

あ、ジャンゴもいつの間にかいなくなってる。

「……あ、キャプテン!」「」

——ドヒュン!!

ウソップは颯爽と俺たちの前を通り過ぎた。そうか、新事実を知ったばっかなんだっけな。

「なんだ、ルフィは一緒じゃなかったのか？」

「まだ怒ってんのかしら…お父さんがバカにされたこと」

「お父さん?何の話だ？」

知ってはいるけど、これまた一応な。

「あいつの親父のことをあの執事がバカにしたんだよ。それに怒ったあいつはあの執事を殴ったんだ」
「へえ〜。やるじゃんウソップ」

やっぱ殴ってたか。

「でも…違うと思う！今の顔は違う！」
「うん！なにかあったんだ！海岸で！」
「あんなに血相抱えてどうしたんだろう？」
「……！！おい、その海岸へはどう行けばいい？」

ゾロの質問を、3人は見事にスルーした。

「大丈夫だよゾロ。俺がおいで分かるから」
「におい？ルフィのか？」
「ああ」

俺たち6人は、ルフィを探しに南の海岸に向かった。
案の定、ルフィは崖の下でいびきをかきながら寝ていた。……崖の下
のルフィってか…。いや、つまらんなwすまないw

陽もだいぶ落ちてきた夕方。
村に戻ってきた俺たちの前に、ウソップがいた。よく見ると泣いて

るな。隠したつもりかよ。

「「「キャプテン!!」「」」

3人がウソップに近づく。

「よお、お前らか……げっ!?!お前生きてたのか!?!」

ウソップはルフィを見て言う。

「生きてた?ああ、さっき起きたんだ」

「おいおい、うちの船長を勝手に殺すなよ」

「い、いや……よく生きてられたな……あの高さから……」

「ししまあな」

まあ、ゴム人間だしな。

「そんなことよりキャプテン!聞きましたよ!!海賊たちのこと、早くみんなに話さなきゃ!」

「……み、みんなに……」

顔が引きつってるなウソップ。

「……は……はっはっはっはっはっは!!」

「「「!?!?!」「」」

「いつもの嘘に決まってるだろ!!あの執事ムカついたんで、海賊に仕立ててやろうと思っただけさ!」

「ん?」

「「「……」「」」

ルフィは不思議がる顔をして、俺とゾロとナミは沈黙している。

「えーっ！？嘘だったんですかぁ！？」

「なーんだ！せっかく大事件だと思ったのに！！」

「くっそー！麦わらの兄ちゃんもさしがねか！」

「え？」

たまねぎはルフィを睨みつける。

「……でも俺、ちょっとキャプテンをけいべつするよ！」

「俺もだ！」

「僕も！いくらあの執事がやな奴でもキャプテンは人を傷つけるよ
うなウソつかないと思ってた！」

3人はウソップに嫌味な態度をとり、ブツブツ言いながら家へ帰っ
て行った。

「……」

「??」

ルフィはまだ不思議がってるな。

*

俺たち5人は南の海岸へ戻った。あたりはすっかり暗くなった。
もう夜か。この村に来てから丸一日がたとうとしている。

俺が海を眺めていると、それまで黙っていたウソップが口を開いた。

「俺は…嘘つきだからよ、ハナっから信じてもらえるわけなかったんだ！俺が甘かった！！」

「甘かったって言っても事実は事実。海賊は本当に来ちゃうんでしょう？」

「ああ。間違いなくやってくる。でも皆は嘘だと思ってる！！明日もまたいつも通り平和な毎日が来ると思ってる！！」

「…だからこの海岸で、海賊どもを迎え撃ち、この一件を嘘にする。そういいてえんだろ？」

俺はウソップの台詞を奪った。

「あ、ああ…そうだ！それがウソツキとして！！俺の通すべき筋つてもんだ！」

「……！！」

「……腕に銃弾ブチ込まれようともよ…ここは俺が育った村だ！俺はこの村が大好きだ！皆を守りたい！わけのわからねうち皆を殺されてたまるかよ……！！」

「…よく言ったウソップ！俺たちも加勢するぞ！そうだろルフィ？」

「ししし…ああ！！」

「とんだお人好しだぜ。子分まで突放して一人出陣かよ」

「言っとくけど宝は全部、私の物よ！」

「え…お前ら……」

） To Be Continued ）

囚われの謎の少女と、坂道の攻防！

俺たち4人はウソップに加勢して、海賊を迎え撃つことになった。

「お…お前ら……一緒に戦ってくれるのか？…どうして…」

ウソップが茫然としている。というか、感動してるのか？w

「だって敵は大勢いるんだろ？」

「困った奴を助けるのに理由なんているのか？」

「怖えって、顔に書いてあるぜ？」

ルフィ、俺、ゾロの順番で言う。

「おー！俺が怖がつてるだど！？バカ言えー！！大勢だろうとなんだろつと俺は平気だー！！」

なぜなら俺は勇敢なる海の戦士、“キャプテン・ウソップ”だからだ！ー！！」

とはいいつつも、ウソップの両膝はガクガク震えてる。それをウソップは何とか抑えようと膝を叩く。

「見せもんじゃねえぞ！相手はキャプテン・クロの海賊団ー！！怖えもんは怖えんだ！俺は同情なら受ける気はねえー！！お前ら帰れ帰れ帰れー！！」

「……」

ナミは黙ってウソップを見ている。

「笑ってやしねえだろ？立派だと思うから手をかすんだ！」

「同情なんかで命かけるか！！」

「まあ、そういうことだ」

「……………うつ……………お前ら……………！！」

ウソップは泣いた。

まあ、ウソップには悪いが、俺的にはたかがキャプテン・クロだからな。

「ここから村へ入るルートはこの坂道一本だけだ！後は絶壁！」

「なるほど。この坂道を死守できれば村が襲われることはねえってことか！」

俺はウソップに言った。

しかし…海岸ってこつちだったわけ？……………まあ、いいか。

「そうか。簡単だな！」

「口で言うのはな！後は戦力次第……………お前ら、何ができる？」

「斬る」

「伸びる」

「ひっかく」

「盗む」

ゾロ、ルフィ、俺、ナミの順番で言った。

ウソップは「隠れる」とぬかしやがったので、全員でつつこんだ。

——ギョルルルルル!!

「あ…」

俺は自分の腹がものすごい大音量で鳴ったので、思わずそう呟いてしまった。

「ちょ…レオンあんたまさか…」

「ん? どうした?」

「「?」?」

ナミは理解したようだが、ルフィ達3人ははまだ分かっていない様子。

「…ゲ…こんな時に…、お、おい! ウソップ! お前の家どこだ!」

俺は必死にウソップに聞いただす。

「な、何だどうした?」

「大便だよ大便!!」

「ああ…俺の家なら、屋敷からちよつと登ったところにあるが…」

「サ、サンキュー!!! 借りるぞ!!!」

——ダッ!!

俺は腹を思いっきりくだしたみたいだ。
クソ! 昼間食ったアイスが原因か!!!?

「おい、レオンの奴どうしたんだ!」

ルフィがナミに問う。

「いつもの下痢よ…まったく、本当に弱いわね…。こんな肝心な時に何やってんだか…」

「すぐ戻ってくるだろ。心配すんな」

「だといけど…」

ゾロはあまり心配していないみたいだが、ナミは若干あきれた様子。

ここクロネコ海賊団の船の中。

船員たちがジャンゴがいると思われる寢室をノックしている。

音に気付いたジャンゴは、部屋からお得意のポーズで後ろ向きに歩き、出てきた。

「「「「「あ、船長おはようございます!」「」「」「」

「バカヤロウ。おはよう」 ってのは朝日とともに言うのが俺のポリシーだ。まだ月も落ちてねえ、真夜中だぞ」

「『それは失礼を……』」

—ツイ

—ツイ

—ツイ

「野郎ども、おはようっ」

「えええええ！！！！！」

「おはようじゃないわっ！！！！！これほどけっ！！！！」

「ああん？」

船の隅っこでは、ロングの長髪でピンクの髪の色をした一人の少女
“クラリス”が、ロープで縛られていた。

「おい、このガキなんだ？」

ジャンゴは後ろにいる船員に聞いた。

「はい。船長が昼間留守のときにいつの間にかこの船に潜り込んで
おりまして……」

「何！？ほんとうかつ？」

「ええ」

「……まあ今はどうでもいい。しばらくこのままにしている。な
んと言つても今はキャプテン・クロの計画遂行の方が先決だからな」

「……わ、わかりやした……」

「ほどけーっ……！！」

少女は思いつきり叫ぶが、海賊たちには軽くスルーされた。

「よし……野郎ども……！出航だあ……！！」

「……うおおおおお……！！……」

「（ム……無視……。もー！なんでこんなことになってんのよおー
……！！）」

一方、南の海岸ではウソップが作戦にと、坂道に大量の油を敷いた。

「奴らがこの坂で、ツルツル滑つてもがいてる隙にぶちのめすつていう作戦だ！」

「でも逆に自分達が落ちなきゃいいけどね。アリ地獄に飛び込むよなものだもん」

「お前良くこんなチョコザイこと思いつくなーっ！」

「当然だ！俺はチョコザイさと狙撃の腕に関しては、絶対の自信を持ってるー！」

ウソップが高らかに宣言したとともに、朝日が昇ってきた。

「…！夜明けた…。来るぞ…」

*

——ザザーン

「こねえな、朝なのに…」

ルフィはそう言いながら地面を蹴っている。

「寝坊でもしてんじゃねえのか？」

「…ん？あのさ…気のせいかしら…北の方でオーツって声が聞こえるの…」

ナミは両手を耳にやる。

「ん！？き、北！！？？」

ウソップは何かに気づく。

「うん！やっぱり聞こえるわ！」

「お、おい！？どうした！？」

「き…北にも上陸地点がある！！ま、まさか…」

「海岸、間違えたのか！？」

ルフィ達一同は、途端に慌てだす。

ウソップはクロたちがこの“南の海岸”で密会をしていたため、この海岸でやると思っていたらしい。しかしそれはとんだ誤算だった。

「ここから真つすぐ走って行けば、北の海岸に着く！！」

「急ごう！！村に入っちゃまうぞ！！」

普段はマイペースなルフィもさすがに慌て始める。

「まずい！！北の海岸っていったら、私達の船がある場所だ！！お宝取られちゃう！！」

ナミは別のことで頭を抱える。

「20秒でそこ行くぞ！！」

——ダダッ！

ルフィは真つ先に走り出した。

「ちきしょお！！せつかくの作戦が台無しだ！！」

——ダッ！

ウソップもルフィに続き、北をめがけて走りだした。

2人に続いてナミも走りだそうとしたところ、油で足を滑らせてし

まった。

「くそ！レオンはまだこねえのか！…しょうがねえ…ん？おいナミ！何やってんだ！」

「きやああ！助けて！落ちるっ！」

——ぐいっ！

ナミは前にいたゾロの服を引っ張った。

「は！？うわああ！手を離せバカっ！！」

「あ、ごめん…！しめたっ！」

ナミはゾロをうまく利用し、油の道をきりぬけた。だが、今度はゾロが滑り続けて落ちてしまった。

「うわ————っ」

「あ…わるいっ！宝が危ないのっ！」

——ダッ！

「！…くそっ！…あの女……」

その頃、

ゾロがいる南の海岸とは逆の、北の海岸では、海賊たちがすでに上陸していた。

「「「ぎゃっはっはっは…！暴れてやるぜっ！…！…！」」」

「「「

海賊たちは、村をめがけて一直線に走りだした。

——ドゴゴゴゴゴ——

「……うわっ！！？だ、誰がいるぞ！坂の上に！！」「……」
「てめえは……」

「俺の名はキャプテン・ウソップ！お前らをず……っとここで待
っていた！！戦いの準備は万端だ！！死にたくなけりゃ、さっさと
引き返せっ！！」

北の海岸に一番に到着したのはルフィではなく、ウソップだった。

村の頂上、レオンサイド

もうヤバい腹がやばい。調子に乗ってアイスなんか食わなきゃよか
った！

ん？……ウソップの匂いだ！！ここか！！……な！ウソップの奴、
玄関に鍵かけてやがる！！くそ……こうなったら、ぶち破るぜ！！
——ドオン——！！

北の海岸、ウソップサイド

俺はなんとかこっちの海岸に到着したが……。
何で俺が一番のりなんだ？あいつ（ルフィ）、俺より先に突っ走っ

てったはずなのに…。とにかくここは、俺が何とかするしかねえ！！

「テメエはあの時…、計画を盗み聞きしてた野郎だな…。何のつもりだ」

あいつは…！あのときの飛び道具野郎か…！！よ、よし…！

「忠告だ…！今のうちに引き返さねえと、一億人の俺の部下どもがお前らを潰すことになる！」

ど、どうだ…！

「な、何イ！？一億人っ！？」

「嘘に決まってんでしょ船長っ！？」

クロネコ海賊団海賊船、クラリスサイド

騒がしいと思ったら何なの……………？

「あれは…ウソップ！？あ、ナミも来た…！！！」

や…やっぱり私…！！

サイドエンド

「その宝は私の物よ！１ベリ―ともあげないわ！しっかり持ってなさい！今取り返してやるから！！」

「お前…」

「あんた！何勝手にあげてんのよ！私の宝を！！」

「痛てえな！そんなこと口で言やあいだろうが！！」

そう。先程ウソップは、ナミの持っている棒で頭を思いっきり叩かれたのだった

「何言つてんのよ……助けてあげたのに」

「何！？」

「あいつのリングを最後まで見ちゃダメ！あいつは催眠術師なの！」

「さ…催眠だと？」

ウソップは、ただの飛び道具だと思っていたらしい。

「で？ルフィは？一番に走ってっただでしょ？」

「さあな…。怖気づいてんのか、道にでも迷ったのか…」

「じゃ、道に迷ったのね…。もうこんな肝心な時に！レオンも戻ってこないし！！」

ナミはとことん呆れた様子。

「よ、よしぶちのめせ！俺が援護する！」

「な、何で私が！？私は弱いなのよ？女なの！！」

ナミとウソップがもたもたとやっているうちに、

「踏み潰して村え進めえ！野郎どもお！！」

「「「「うおおおお！！！！！」」」」

海賊たちが本格的に攻めてきた。

「き、きたわよっ！！！！」

「……！そうだまきびしっ！！」

「ちよつと！いいものもってるじゃない！！貸してっ！」

「「「「どけどけえええ！！！！」」」」

「「これでも喰らえ！！まきびし地獄！！」」

ナミとウソップは前方にまきびしを散りばめた。

果たして、レオン・ルフィ・ゾロと主力の3人が不在の中で、ナミとウソップの2人はどうこの場を切り抜けるのだろうか！？

（To Be Continued）

まさかの二人目の転生者！その名はクラリス！

シロップ村、南の海岸

「ハア…ハア…ハア…」

ナミに突き落とされたゾロは、いまだに油の坂道を登れずにいた。

「畜生お、ナミの野郎…ゆるさねえ…」

——キン！

ゾロは二本の刀を手を取った。

「うをおおおお！！！」

——ガガガガッ！

自分の刀をうまく活用したゾロはなんとか油の坂道を抜け、北の海岸めがけ走り出した。

「おっしや抜けたあ！……………？北の海岸てのはどっちだ？」

シロップ村、北の海岸

「うぎゃー！！」

「あだーっ！！」

「いてえーっ！！」

ナミとウソップのまきびし地獄に見事にはまった海賊の手下たちは、奇声をあげながらもがいていた。

「よしっ!!」

「今だ必殺!鉛星!!」

「うごっ!!?」

ウソップの持つパチンコから出てきた一発の鉛玉は、敵の一人に命中した。

「やるじゃない!その調子で頑張って!私はひとまず休戦するから」

ナミはウソップの肩をポンッと叩きながら言った。

「まだ戦ってもいねえのか!!?」

「……!!ウソップ後ろ!!!!」

「え……?」

——ゴキッ——!!

「……!!ウソップ!!!!」

「が……はっ……」

ウソップは不意を突かれ、海賊の一人が持っていた石斧で頭を叩かれた。

「へっ!俺たちを本気で止められると思ってんのか?行くぜ皆!キヤプテン・クロが待ってる!」

「……」 「……」 「……」 「……」 「……」

「ん?……な、何だこいつ?」

「ウソップ……」

頭から血を流しその場に倒れたウソップだが、わずかな力を振り絞り石斧の男を裾をつかんでいた。

「手を離せえ！！この野郎！！」

——ガン！ガン！

男はさらにウソップの頭を石斧で殴り続ける。

「……くっ……こ、この坂道！通すわけにはいかねんだ！俺はいつも通り嘘をついたただけなんだから……村ではいつも通りの一日が始まるだけなんだから！！」

大量の血を流し続けるウソップは、必死に抵抗する。

「くそガキ黙れ！！！」

「！！！」

——ガンッ！

ウソップの背後から刀を持った男がウソップを刺そうとしたが、ナミがその男を棒で殴り返した。

「この女！！」

「！！！」

——ガキーン！！

——ドカーン！！

ナミは攻撃をガードしたものの、岸壁へ吹っ飛ばされた。

「あう！！い……たあ……」

女のナミには今の攻撃は相当痛いはずだ。

「お前……」

「ちッ……おいてめえら！そんな奴らかまってねえでさっさと村を襲えー！これはキャプテン・クロの計画というのを忘れたか！……あの男の計画を乱すことがあったら、俺たちは全員殺されちまうぞ！……わかつてんのか！……」

ジャンゴは手下全員に怒声を浴びせる。

「………！！い、急げ！！村へ！！！！」

「それでいい……」

「………うをおおおお！！！！」

海賊たちは再び村をめがけ、走り出した。

「やめてくれ！頼むから！！村へ行かないでくれえ！！……皆を殺さないでくれえ！！」

「あ……」

「………うっぎゃあああ！！！！！！！！」

「やっときた……」

クロネコ海賊団海賊船、クラリスサイド

ピンクの長髪の少女クラリスは状況を把握したようで、まずは自分にまかれている縄をほどくことに専念していた。

「………やった！なんとかほどけたわ！！」

…信じたくないけど…理解したわ。あの“神様”とかいうお爺さんなのか若者なのかよく分からない人が言ったとおり、私は転生してきたのね！…ワンピースの世界に！！

あ…！！あれは…ブチとシャムね！！見つからないように、こっそり降りよつと。

クラリスは海賊船をこっそり通り、近くにあった岩場に隠れた。

あ！いつの間にか、ルフィとゾロが来てる！！

サイドエンド

危機一髪という時に、ルフィとゾロがギリギリでこの場にやってきた。

「あんたたち来るのが遅いのよ！！」

「何イ！？お前が俺をおとし入れたんだろうが！」

「あれは事故よ。仕方ないでしょ？二人落ちるより、一人助かった方がいいじゃない」

「じゃあ、お前が落ちろ！」

「だいたいな！北とか北じゃないとかそついうのでわかるわけないだろ！」

「何イ！？お前自身持って真っ先に走り出しただろ」

「あれはなんとなくだよ！なんとなく！」

ルフィはウソップと、ゾロはナミと言い合いになっている。

クラリスサイド

何やってんのよ！あの人たちは！！

私の記憶が確かだと…あの後あいつらは催眠をかけられて強くなるのよね……！！やっぱり！崖がえぐれた！こ、ここも危険ね！とりあえずナミ達のところまで行きましょう！

クラリスはジャンゴや海賊たちにはれないように、ナミ達のところへ向かって行った。

サイドエンド

「お前ら、坂の上へあがつてろ！ここは俺たちがやる！……ん？お
いルフィ！……ルフィ？」

返事をしないルフィにゾロは違和感を感じた。

「うおおあああああ！！！！！！！！」

「お前も催眠にかかってんのかあ！！！！」

あろうことかルフィもジャンゴの催眠にかかってしまっていた。

「うあああああ！！！！！！」

「おい！ルフィ！！」

「ゴムゴムのっ！！」

「……………うをおおおおお！！！！！！！！！！」

ガトリング
「銃乱打！！！！」

ルフィの無数のゴムゴムのパンチが、海賊たちにクリーンヒットす

る。

「な、何だあいつ…手が…？」

ウソップは初めてみるルフィの能力に驚愕している。

クラリスサイド

やっぱり！ルフィも催眠にかかったのね！そのまま、船首をもぎ取って下敷きになるのも原作通りになったわね！

いや…そんなことより、どうしよう……。話しかけるしかないわよね！

サイドエンド

ナミサイド

全く…。

単純にもほどがあるわよ…ルフィの奴。

ゾロに言われて、私とウソップが坂の上で休んでいると、後ろからピンクの長い髪の女の子がこそこそとやってきた。え？誰？

「…誰？…まさか！あんたも敵なの！？」

「ちっ、違います違います！！私はいつらに捕らえられていたんです！！」

「捕らえられてただと？本当か？」

ウソップはまだ疑ってるわね…。でも、こんな小さな子が本当にあいつらの仲間なのかしら？

その声を聞いたジャンゴと海賊たちは、安堵の表情を浮かべていた。

「ちっ、まだ船の中に何かいるみたいだぜ」

「……!?!」

「(いよいよニャーバン・兄弟^{ブラザーズ}がでるのね…)」

〔To Be Continued〕

ゾロVSニヤールバン兄弟〜大凶

北の海岸坂の上、クラリスサイド

ワンピースの世界に転生してきた私は、何故かクロネコ海賊団の船の中にいて、でも何とか逃げ出したの。

今はナミ達と一緒に坂の上にいるわ。

あ、そんなことより今は大変！ついにあのニヤールバン兄弟ブラザーズが船から降りてきたのよ！

「なにあれ……」

「すげえ……あの高さから着地した……猫みてえだ……」

「……？」

ナミとウソップの2人はそれぞれ見た感想を言ってる。ゾロはじっと見てるわね。

あ、言い忘れたけどルフィは船首の下敷きになったまま寝てます。ここまで全く原作通りね……。起こしに行った方がいいのかな？

「ブチ、シャム。俺たちはこの坂道をどうあっても通らなきゃならねえんだが、見ての通り邪魔がいる！

あれを消せ！」

「そ、そんな無理っすよぉ。僕達には。なあ？ブチ」

「お、おう。あいつ強そうだがマジで」

うわぁ……。確かあれねこかぶってるのよね？

趣味悪。

「だいたい僕達は船の番人なんだから」

「そうそう。こんな闘いの場にかりだされても」

「うるせえ！シヤム！さつさといかねえか！」

「わわ、わかりましたよ！行きますったら！」

あ、来たわ！言った方がいいのかな？ねこかぶってるって…。

「そ、そいつ！きつとねこかぶってるわ！気をつけて！」

「「え？」」

「ああ？」

つい言っちゃったけど…。3人とも驚いてる。

初対面の私のいったことなんて聞かないわよね…

「ちっ…ねこかぶってるって言われてもなあ…。！！おい！お前止

まれ！！斬るぞ！！」

「斬れるもんならな…」

「何っ！？こいつ…」

——ガキン！

ゾロはシヤムのかぎづめを刀で受け止めた。

「まさか…あいつ本当にねこかぶってたのか！！」

って…。信じてなかったの？ウソップ…。

「ちっ…」

「！！ゾロ！？刀は！？」

「…？な、ない！」

シヤムはいつの間にかゾロの二本の刀を背中にしよっていた。

「ん？何かなくしたのか？俺はしらねえがな…」

「出たか…」

「ネコババ」

「（この野郎…俺の刀を……！）」

凄い…。漫画で見るのと生で見るのはまるで違うのね…。

クラリスは初めて生で見るワンピースの戦闘シーンに圧倒されていた。

「まずいわね…。刀取られちゃった…」

「どうするんだ…あいつ…」

サイドエンド

その頃村ではピーマン・にんじん・たまねぎのウソップ海賊団3名が木の下に集合していた。

「え！？屋敷の執事が海岸へ！？」

「うん！そうなんだ！」

「おいにんじん！寝るなよ！」

ピーマンは眠そうなにんじんを指をさして注意する。

「だっていつもは寝てる時間だよ」

「今日は寝てる場合じゃないかもだよ！大変かもしれないんだぞ！」

「「大変？」」

「うん！僕はやっぱり海賊は攻めてくると思うんだ！昨日キャプテンはウソだといってたけど、それがウソだと思うんだ！」

「それは俺も考えた」

「じつは俺も！昨日のキャプテンはなんか変だった」

たまねぎの意見に、ピーマンとにんじんの二人も賛同する。すると三人の前方に、どこかへ向かうカヤの姿があった。

「あれ…カヤさんだ！」

「カヤさんが一人で外を出歩くなんて…」

「なにかある！絶対何かあるんだよ！ついて行ってみよう！」

3人はカヤの後をつけて行った。

シロップ村、北の海岸

ゾロとシャムの戦いはシャムが圧倒していた。刀一本のゾロには攻めにくいようだ。

「やれ！今だブチ！！」

「がってんシャム！！」

ゾロはシャムに背中を地面に抑えつけられ、苦しい体勢になった。

「猫殺！！キャット・ザ……」

シャムは空中に舞い、ゾロに狙いを定めた。

「「危ないっ！」」

ナミとクラリスが同時に叫ぶ。

「！……！」

「フンジャッタ……！」

——ドオオン！！

ブチの強力な技は、地面にヒビを入れるほどだったが、ゾロは紙一重でそれをかわした。

「くっ……」

「おいシャム！しつかり押さえてろよ！」

「わりいわりい。あんにやる思ったよりバカ力だよ！」

「あぶねえ……。あんなのまともに喰らったら、全身の骨が粉々になっちゃうぜ……。しょうがねえ、一刀流はあんまし得意じゃねえんだが……」

ゾロは一本しかない刀を、守りの形でかまえた。

「「ネコ柳大行進！！シャシャシャシャシャシャ……！」」

——ギギギギン……

ゾロはなんとか攻撃を受け止めてはいるが、守ることしかできず攻撃はできない。

「くっ………！！しまった！」

「「シャア……！」」

「ぐわ……！」

不意を突かれたゾロは、かぎづめを腹に喰らってしまった。

「（くっ…せめて刀が後一本あれば…）」

ゾロはシャムとブチの後ろに落ちている自分の刀をちらつと見る。

「まずいわね…。……よし。私が刀を取りに行くわ！ゾロに渡せば必ず勝ってくれるはず！」

「え？危ないわよ！」

「そうだぜ！だったら俺が！！」

「無理しないの！あんたらはフラフラでしょ！？」

クラリスもずっと縛られていたため、あまり自由な動きはできないのだ。

ナミは岸壁から飛び降り、ゾロの刀を目指し走り出した。

「おい！」

「あいつ…何を…？」

ゾロも横目でちらつとナミを見る。

「これさえ渡せば……………！！？」

「「あ！！」」

——ズバッ！

ウソップとクラリスは同時に叫ぶ。

「刀に何の用だ…」

「きゃあ！」

——ドサッ！

刀まであと一歩だったナミだが、待っていたジャンゴのチャクラムで肩を斬られ。そのまま地面に倒れこんだ。

「野郎…唯一の希望を…」

「くっ…」

ウソップは齒を食いしばる。

原作を知っているとはいえ、女でなおフラフラの今のクラリスにも何もできない。

「…あ…いや…これは…その…事情があつてよ………」

「え?…」

急に怯え出すジャンゴを見たウソップとクラリスは、ジャンゴの視線に合わせ横をチラッと見た。

「うわ…あつ…」

ゾロを圧倒していたニヤーバン兄弟も攻撃を止め、ジャンゴと同じように震えだす。

「……「キャ……キャプテン……クロ……こ、殺される……」」

「」

なんとクロネコ海賊団全員が震えだした。

「もうとつくに夜はあけきつてんのに…なかなか計画がすすまねえと思つたら………何だ!……!このザマはあ!……!」

ゾロとニヤーバン兄弟の背後、ウソップとクラリスの目の前に現れたのは、今回の計画の発案者でクロネコ海賊団元船長のキャプテン・クロだった。

「ちっ…」

「（最悪だ…何てタイミングで現れやがる…）」

「（これが…キャプテン・クロ…）」

「うっ…」

「zzzz…」

（To Be Continued）

カヤお嬢様決死の抵抗！ついにレオン到着！！

ついに戦場に現れたキャプテン・クロ。

この場にいる全員の（ルフィとナミ以外）視線がクロに集中している。

「まさかこんなガキ共に足止めをくつてるとは……クロネコ海賊団も落ちたもんだな……ええ！！！？ジャンゴお！！！」

クロの怒声に、ジャンゴは震える。

「だ、だがよ……あんたあの時、その小僧ほつといても問題ねえって……そついったじゃねえかよ！！！」

震えながらもジャンゴは口を動かす。
ちなみに小僧とはウソップのことだ。

「ああ……確かに言ったな。だが問題はないはずだ。こいつが俺たちに立ち向かってくることぐらい……容易に想定できていた……。ただてめえらの軟弱さは計算外だ……」

「な……軟弱だと……俺たちが……」

「言ってくれるぜ……キャプテン・クロ……」

『軟弱』という言葉にブチとシャムの2人はピクリと反応し、眉を動かす。

「確かにあんたは強かった……。だがそれはもう三年前の話だ……！」「おおうよ！あんたがこの村でのんびりやつてる間……俺たちはいくつもの村を襲い……いくつもの船を沈めてきた……」

「仲間割れか？」

「みたいね……」

クラリスは原作を忘れているのか忘れたふりをしているのか、ウソツプと話を合わせる。

「な……何がおきてるの……？」

ナミも肩を押さえ、何とか起き上がった。

「計画通りにいかなかったぐらいで殺されてたまるか！それに俺たちはもう俺たちのキャプテンじゃねえんだ！」

「黙って殺されるぐらいなら殺してやる……！」

ニヤーバン兄弟の2人は爪を立てクロに襲いかかったが、クロは一瞬で二人の背後に移動していた。

しかもクロの両手の指にはそれぞれ五本ずつ、合計十本の武器があった。

「な……いつのまに背後へ……」

「（やっぱり速い……！）」

「お前らの言うことは正論だな……今一つ体になまりを感じるよ……」

「「ヒイ……！！」？」

いとも簡単にクロに背後を取られ、捕まってしまったニヤーバン兄弟。

「確かに俺はもうお前らのキャプテンじゃねえ……。計画の依頼人だ……！！遂行できなきゃ殺すまで……！！」

「（刀一本とはいえ……ゾロを押してたやつらがまるで子供扱い……）」
「何を期待してやがるデメエラ……」

「……「船長……」……」

「あの男の“抜き足”は無音の移動術。暗殺者50人集めても気配を感じることなく殺される。俺たちはこの計画から逃れられやしないんだ……」

「……「……!!」……」

クロの凄さを改めて知った手下達は、つばをごくつと飲み込んだ。

「元仲間としてのよしみだ……。5分だけ時間をやろう……。5分でこの場を片づけられねえようなら……てめえら一人残らず……俺の手で殺してやる……」

「……「死にたくねえよ……!!……」……」

「5分……」

手下達は泣き叫び、ニャーバン兄弟は息を吐いた。

「ケツ……何が5分だ……」

ゾロはクロをにらむ。

「畜生!!こんなやつが3年も同じ村に住んでたなんて!!」

「さ、3年もいたのにきづかなかったの!？」

「きづくかよっ!!」

ウソップは初めてクラリスにつっこんだ。

「……あいつだ!!あいつさえぶつ殺せば俺たちはこの坂道を抜けられるんだ!」

「ゾロ!!刀!!!!」

——バシィッ!!

ナミはジャンゴの隙を突き、刀をゾロのところまで蹴り飛ばした。

「てめえは…俺の刀まで足蹴に…!!」

「……ありがとうは？」

「!!ああ…ありがとうっ！（助かった!）」

ゾロは残りの二本の刀を手に取り、三刀流の構えをとる。

「「シアアアア!」」

「「「頼むぞニャーバン兄弟!!5分以内だぞお!!」」」

「虎…狩り!!!!!!」

——ズバンッ!!

「「「!!!?」」」

「「やった」」

「強ええ」

ナミとクラリス、ウソップも一瞬だが笑顔を見せた。

「「「い…一撃!!あのニャーバン兄弟を!!」」」

「フン…心配すんな!5分待たなくてもお前らは一人残らず、俺が潰してやる」

ゾロはクロに刀を向けて言い放った。

「…やってみろ」

それに対しクロも気迫で応じる。

「ハアハア……せつ船長!!ジャンゴ船長!俺に催眠をかけてくれ

「!!」

倒れたはずのブチが、何とか立ちあがり、ジャンゴに近づいた。

「チツ…タフな脂肪のおかげで助か…!!!!?」

「ヌツフーン!!!」

ジャンゴの催眠で、ブチは立ち上がった。

「まさか…また催眠か!!?(あいつは厄介だ…ただでさえ地面にヒビを入れるやつなのに…パワーアップしたらどうなっちまうんだ!!!?)」

「フン…皆殺しまで…後3分…」

「…さ、3分であいつを片づけられるのか!?ジャンゴ船長といえどブチさんといえど…」

手下達は後のない絶望に悲鳴をあげつつける。

——ザッ!

「ん?」

不意にクロの背後から足音がした。クロが振り返ると、

「クラハドール!!!もうやめて!!!」

「……………!!!」

寝ているルフィ以外の全員が驚愕した。突然この場にやってきたのはカヤだったからだ。

「カヤ!!!お前何しに!!!」

「（あれが…カヤお嬢様…原作通りの人だ…）」
「カヤさん…何で？」

ウソップとナミは同様の理由で驚いているが、クラリスは違ったらしい。

「おい！あいつは屋敷の娘じゃねえか！！」
「…これは驚いた…カヤお嬢様…なぜここへ？」

クロはカヤと視線を合わせる。

「メリーから全部聞いたわ…」
「…ほう…」

「カヤ…お前何をしに来たんだ！！俺は逃げろって言ったんだ！！」
「貴方は戦ってるじゃない！！私達はあんなにひどい仕打ちをしたのに！傷だらけになって戦ってるじゃない…」

「…カヤ…」
「（カヤさん…何ていい人…）」

ウソップの隣でクラリスは一人涙をこぼしている。

「クラハドール！！私の財産が欲しいのなら全部上げる！！だからこの村から出て行って！！」

「……。違いますね…お嬢様。確かに金もそうだが…もう一つ私は平穏が欲しいのです……」

クラリスサイド

キャプテン・クロの話をまとめると、

こいつは平穏と財産が欲しくてはじめて計画は成功すると言ってる。

村に海賊が入って攻め入る事故と、カヤさんが遺書を残すことが絶対条件らしいわ…。やっぱり！なんて非道な奴！！

そんなことを私が思っていると、カヤさんはクロに銃口を向けた。

サイドエンド

「覚えていますか？3年間いろいろなことがありましたね…。町ま
で出かけたり、貴方が熱を出せばつきつきりで看病を…。共に苦しみ
笑い喜び私は貴方に尽くしてきました！…夢見るお嬢様に尽くした
のもそれに耐えたことも…。すべては貴様を殺す、今日の日のた
め！！」

「！！！！！！」

これを聞いたカヤは持っていた銃を地面に落とし、涙を流し始めた。

「野郎……」

ウソップは怒りが収まらなくなり、鬼の形相になってきた。

「かつてはキャプテン・クロと名乗ったこの俺が、ハナツたれの小
娘相手にニコニコへりくだって、心ならずもご機嫌を取ってきたっ
てわけだ…わかるかあ？この屈辱の日々……」

「……！！」

「クロおおおおお！！！！」

ウソップは飛びだし、クロに殴りかかるうとする。

「！！！！ウソップさん……」

「！！！！ウソップ君…そう言えば君には…殴られた恨みがあつたな…」

ウソップのパンチをクロはかわし、ウソップの背後に立った。

「な……!!」

「思いつきり殴ってくれたよな……」

——ザッ

「じゃあ、俺が殴ってやるよ。外道があ……!!」

「……!!」

——ドガッ!!

クロの背後に現れた何者かが、クロの顔面を殴り飛ばした。

——ドサッ!!

「な、何だ!!」

「……キャプテン・クロが吹っ飛んだ!!」

ジャンゴと手下達も驚愕する。

「……ハア……やっときたわ……」

「来るのがおせえよ……バカ……」

「お前……」

「え?? 誰?」

ナミとゾロは呆れ、ウソップは驚き、クラリスは不思議なまなざしでその人物を見ている。

「もう大丈夫だ! スッキリしたし、力は満タンだ!!」

現れたのは、レオンだった!

レオンは右手のすべての指をパキパキと鳴らした。

{
T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d
}

追え！！～クロVSレオン

オッス！久しぶり！そしてごきげんよう！レオンだ！！

ウソップの家でスッキリした俺は、北の海岸へと到着した。
とりあえずあたりを見渡してみた。うん、全員いるな。ルフィは…
船首の下敷きになってんのか確か。
あれ？…カヤお嬢様が来たときはルフィはもう起きてたはずなんだ
けどな…。まあいいか。

「……な、何だあいつ！！？」「……」

クロネコ海賊団の雑魚達は、俺を見てビビってる。

「……キャプテン！！！！」「……」

「！？お前らどうして……」

「貴方達…来ちゃだめだって……」

レオンの背後から、ウソップ海賊団の面々がひょこつと出てきた。
ピーマンはバット、にんじんはフライパン、たまねぎはスコップを
武器として手に持っている。

「途中でバツタリ会ってな。俺が連れてきたんだよ」

「何イ！？お前なんでそんなこと……」

連れてこないわけにやいかねえだろ？

「やっぱりだ…。やっぱりキャプテンは戦ってた！」

「何で言ってくれなかったんですか！汗臭いじゃないですか！」

「違うよッ！水くさいじゃないですかッ！」

「何くさくてもいい！とにかくお前らここから逃げろ！離れるんだ！」

ウソップがガキ共に色々言うもんだから、俺がまとめてやった。

「大丈夫だウソップ！俺は考えなしにこいつらをここまで来させたんじゃないーからな。こいつらだって立派な海賊団の一員だろ？何か出来ることはあるはずだからな」

「こいつらに……」

「「俺（僕）たちにできること……」」

分かってくれたかな？

ん？……あれ？今この場にいるのは、俺、ゾロ、ナミ、ウソップ、ピーマン達3人、クロ、ジャンゴ、パワーアップしたブチに、カヤお嬢様……寝ているルフィと……あの女誰だ？？？

レオンはクラリスをじつと見た。

原作を思い返しているレオンの前で、殴り飛ばされ倒れていたクロが立ちあがった。

「まだ……仲間がいたのか……」

「ようやくお目覚めかい」

もう一度、右手のすべての指をパキパキと鳴らすレオン。

しょうがねえ。今はこいつらを片づけることに専念して、あの女のこととは後で考えよう。

「ジャンゴ……！」

「お…おう…！」

「この青髪の小僧は俺が殺る…。お前には力やお嬢様を任せる…。計画通り遺書を書かせて…、殺せ」

「…！」

力やが体がピクツと反応する。

「それにアリを3匹…目障りだ…」

「…引き受けた」

命令を受けたジャンゴは、坂道を登り始めた。

「止まれ」

「…！」

ゾロがジャンゴの前に立ちふさがる。

「こつから先は、通すわけにはいかねえことになってんだが」

「…ブウーチー…！」

「ヌツフーン…！！シャアア…！！」

「あいつ…！またあれか…！」

「…ブワッ…！」

ブチはジャンプし、空中からゾロに狙いを定める。

「キャット・ザ……フンジャッター…！」

「…ボコオン！」

「…ピキピキピキ」

ブチが繰り出した技は、パワーアップしたため、さっきとは比べ物

にはならないほどのパワーを誇った。

「地面が割れたあゝゝゝ！！！！！！」

ピーマン達が叫ぶように、地面が割れ、崖も一部だが崩れ落ちた。

「…加減知らずが…」

クロは言う。その後ろにいるカヤも驚いている。

「きゃああー！！」

「……あぶねえ……！！」

——ダッ

クラリスの頭上から大きな岩のガレキが降ってきたが、レオンが何とかクラリスを捕まえ、安全な場所へと運んだ。

「つと」

「…ど、どうも」

「いいけどよ…それよりお前誰だ？」

「…詳しいことは後で話しますよ。今はそれどころじゃないですよ」

「あ…ああ…そうだな」

レオンはクラリスに疑問を抱きながら、崖を降りた。

気になるなああの女……この前のあの馬野郎と同じパターンってわけでもないみたいだし。

あ！ゾロがブチに押されてる。

「くっ… テメエは…」

「シャアアア…」

「テメエは俺に一度負けてんだろっが…… 邪魔をするなッ！」

——ドガッ！

ゾロは左足でブチを蹴り飛ばしたが、すでにジャンゴは坂の上まで登っていた。

「しまった… あいつ…」

ウソップサイド

畜生お…。体がフラフラで立ち上がれねえ……。あいつを…あの催眠野郎を止めなきゃならねえのに……。今の俺に出来ること……。そう、そうか！

「ウソップ海賊団！！」

「…は、はい！キャプテン！！」「」

ウソップは大の字でその場で倒れこみ、空に向かって叫ぶ。

「カヤを守れ」

「！！ウソップさん…」

「…！！！！」「」

「最も重要な仕事をお前達に任せる！カヤを連れてここを無事に逃げる！！できないとは言わせないぞ！！これはキャプテンの命令だ！！」

今の…キャプテンとして俺に出来ることはこれしかねえ！！！！頼む

ぞお前ら!!!

サイドエンド

「ハ、はい！キャプテン！！」

三人はカヤの手を取り、林に向かって走り出した。

「バカが…俺から逃げられるわけないだろう！！」

ジャンゴはチャクラムをくるくると指で回す。

「させるか！必殺！鉛星！！」

——ドスッ！

「ふごお！？」

ウソップのパチンコ玉がジャンゴの尻に命中した。

「へへ…ざまあみる…」

「こ…この野郎めえ……」

「ジャンゴ！！さっさと追わねえか！！」

「わ、わかってる！」

ピーマン達は無事林の中に入ったな。これで一安心だ。

「ゾロ！ウソップを担いであの催眠術師を追ってくれ！」

「…そうしてえとこだが…。この馬鹿がそうはさせてくれねえみて

えだぜ」

「シャアアアア！」

ブチは唸り声を挙げる。

「心配すんな。こっちは全部おれに任せてくれればいい」

「…了解！ルフィとナミを頼んだ！」

「ああ！急げ！」

頼むぞ！ゾロ！

ん？ウソップ！！

——ドサッ

「ウソップ！！」

俺とゾロは同時に言った。

「ぢ…ぢぎしょう…！体が動かねえよ…」

ウソップは体がガタガタで、もう動ける力もほとんど残っておらず歩き出そうとしたが、その場に倒れた。

「くはっはっはっは！！笑わせてくれる！まあ、そこで倒れてた方が安全だろうよ。貴様がジャンゴに追い付いたところで、所詮かなわぬ相手だ」

クロはウソップを見下しながら言った。

「敵わなくなつて守るんだ！あいつらは俺が守る…！！」
「あ？」

「ウソップ…」

「ウソップ！よく言った！」

「……へへへ！見ろよ！！あいつ変なカッコで何か叫んでるぜ！！泣いてやんの！！ぎやははは！！」「……」

クロネコ海賊団の雑魚どもがウソップを見てげらげら笑っていた。
このカスどもが……！！

——ドコオン！！

怒りが頂点にきた俺は、海賊たちに岩を投げ飛ばしてやった。

「……ぎゃああああ！！！！！！」「……」

俺はその岩の上に乗る、奴らを睨みつけた。

「何がおかしいっ！！！！？あと一回でもウソップを笑ったら、てめえら全員なぶり殺す！！」

「……ひいいい！！！！！！！！？」「……」

雑魚のくせにげらげら笑いやがって。

「ゾロ！早く！！」

「おう！行くぞウソップ！」

ゾロはウソップを担いだ。

「わ、わりいな……」

「本当は俺一人の方がはええんだが……。なんせ林の中だ。お前の案内がなきゃ追いつきようがねえ……」

「フン。俺が素直にここを通すと思うか？ブチ！！」
「シャアアア！！」

ブチはゾロ達に襲いかかろうとしたが、その前に俺がブチの肩をつかんだ。

「おい！ゾロ達は急ぎなんだ。邪魔するな！！」

——ザクツ！！！！
「！！！！？？」

俺は散魂鉄爪でブチを斬り裂いた。
いつの間にか技名言わなくても爪が伸びてくれるようになったな。

「……あ！催眠状態のブチさんが……こつもあつさり……」

ゾロ達はうまく抜け出し、林の中に入って行つた。

よし……？いつの間にかあの女どっかに行つたな？……まあいいか今は。

レオンが言つあの女とはクラリスのことである。

「あとは俺がテメエを片づけければ、すべて終わりだあ！」
「……」

レオンは空中にジャンプし、上から攻撃の構えに入つた。

「散魂……鉄爪……！！！！」
——ドオン！！

さすがにクロの動きは速く、レオンの攻撃を簡単にかわした。

「……………あ、あんにやろ…キャプテン・クロとはりやってやがる……………」

「戦う前にひとつ聞いておこうか…余所者のお前がなぜこの村のことに首を突っ込む！」

「…これは原作でもルフィに聞いてたやつだな。だが俺はルフィじゃない！答える義理なんてねえ！」

「今から俺に殺られる奴に言う義理はないぜ？外道執事さん…」
「俺が？殺られる？フフ…笑わせてくれる…」

——ブオオッ！

クロは俺に攻撃を仕掛けてきた。

無駄だ…！！

「飛刃血爪ひじんけつそう！！！」

——ズバババ！！

レオンは先ほどブチをしとめたときについた爪の血に妖力をこめ、硬化させ刃として飛ばした。

「何っ！？…ぐわっ！」

クロはレオンの攻撃をまともに喰らった。

「…くっ…貴様何者だ？？」

「さっき俺が言ったことを聞いてなかったのか？そんなことを今から俺に殺られるお前に言う義理はないって言ったばかりだろ？」

「…小僧…いい気になるなあ…！！」

——ビュッ！

クロはレオンの視界から消えた。

ト
Be
Continued

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6752x/>

ONE PIECE ~ 青髪の転生者 ~

2011年11月20日12時40分発行